10月號

婦人運動

第6卷 第9號

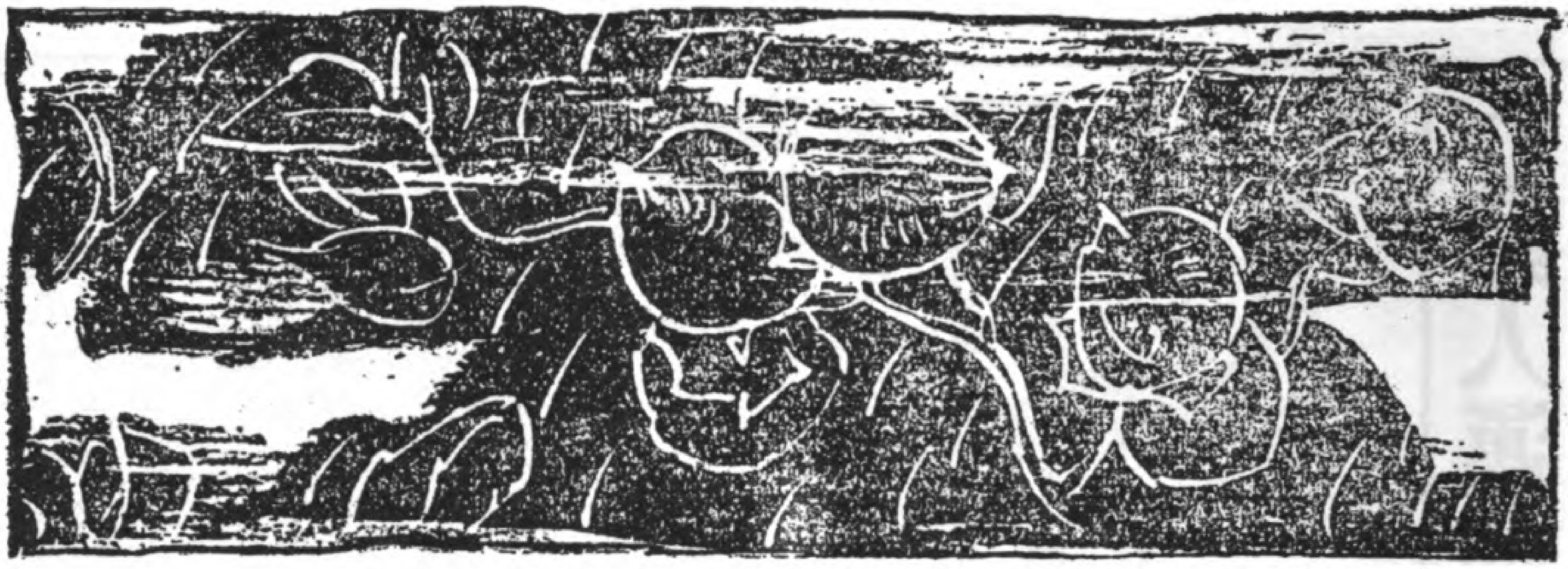


大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行） 昭和三年九月二十日印刷納本 同三年十月一日發行 第六卷第九號

職業婦人社發行



婦人運動 十月號 第六巻第九號 目次



◇女性運動研究家は先づ女性勞働運動史を研究しろ！

解放群書（29）

赤松克麿・明子共著

特別上製箱入 四六判三百頁

定價壹圓 送料拾錢

英國婦人勞働運動史

◇本書は曩に厚生閣から壹圓八十錢で出版されたものと同一物なる特別上製の新版である。絶對必要上壹本を購求した女性問題、社會問題の研究家は、傍ら又、世界の定評ある、この名著のこの名譯が、この製本この上紙この頁數で何故壹圓で賣れるかといふことを研究する必要がある。

◇女性問題研究家は勿論の事、社會運動研究家も婦人運動研究家も是非この世界的名著名譯を一本購求讀破する必要がある。

◇圓本家は勿論の事、出版家も著述家も是非この壓倒的特別廉價版を一本購求熟考する必要がある。

内容

○序
○初期の婦人勞働組合
○婦人聯盟並婦人團體の設立
○男子組合の開放
○全國聯合會及近代組合運動
○歐洲大戰の危機以後

◇婦人運動を知らんとせば先づ英國婦人勞働運動史を知れ！

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所

解放社

東京芝區新櫻田町十九番
振替東京三六九四四番



婦人運動

十月號

火元は何處だ

永雨つゞきで失業者の數がどつと殖えて、あつちでもこつちでも飯の食えない悲鳴の聲が殺人、自殺の慘劇にまぢつて聞える。と一方では、天井知らずに米の値段がボウ騰して、その背後には政府筋の有力者が私かに米の買占めをやつて米價を釣上げたと云ふ噂が高い。これでは思想が惡化しない方が不思議だ。

思想取締りの爲めに特別高警費二百萬圓、思想善導費九十七萬圓、失業救濟費零。

火事があるから半鐘を打つ人間がある。うろたえ騷ぐ人間が出る。興奮してがなりたてる人間が出るのだ。火元を消さないで、いくら蒸汽ポンプの水を、半鐘を打つ男や騷ぎたてる民衆の頭へぶつかけたつて、火の消えるわけがない。

火元はどこだ。



全國的になつてゆく電燈料値下げ運動

大正七年の米騷動で有名な富山縣滑川町に火蓋を切つておとされた電燈料の値下げ運動は、だん〳〵全國的になつて行つて、高知、熊本、群馬、栃木、埼玉、千葉、茨城、青森、福島、新潟、神奈川、石川、福岡、大阪、東京、と各縣下に波及して盛んに行はれてゐると云ふ。

元來、電氣事業のやうなものは（瓦斯水道、電車などと同じやうに）他の一般の事業とちがつて、獨占的な事業であつて、つねに官憲の保護のもとにその配給地域の獨り占めをやつてゐるために、營利會社であることに變りはないのであるが、おとくゐ即ち消費者に對してはつねに專制君主のやうな絶大な權利を以て臨んでゐるのを普通とする。さき頃秋田へ行つた時にも、農民自動車利用組合の赤阪君の村のごとき、半里さきに發電所があるにも拘らず、西明寺村が貧乏のために會社側が要求するだけの敷設料を支拂ふことが出來ないものだから、今だに村の者はランプで用を足してゐるといふことを聞いた。而も、村民の勞働を提供するから、それを金子に換算して早く電燈をまわしてほしいと賴んでも、未だに聞き入れてくれないといふのである。

實に暴虐な話で、それでゐて、隨分不當な暴利をむさぼり、政治家を買收していろ〳〵不正なゴマカシをしてゐることについては、今日では消費者の方でよく知つてゐる位であるが、獨占事業であるだけに、それではあなたの處との取引きをやめますといへばそれきりで、外にこれに代る競爭會社が、大抵はないものであるから自分が不便をうけるだけに終り結局泣寢入りに會社側の云ふまゝになるより外ないのである。かういふ不平不滿が積つてゐたからこそ富山の爭議が導火線となつて、あつちでもこつちでもと、全國的に火の手をあげて來たものと考へられる。

では、この正當な民衆の抗爭に對して各地の官憲が何故取締りを名として壓迫を加へてゐるか、と云ふと、それは、いふまでもないことであるが、獨占事業に資本家は附き物であり、資本家には政治

家は附き物で、資本家の走狗としての政治家と官憲とはこれ又附き物であるからである。

　われ〳〵は、獨占事業であることをよいことにして一般の人々の不便や不服をふみにじつて勝手に暴利をむさぼる會社と、敢然たゝかはなければならないのであるが、それと同時に、かうした爭議を通して、現在の政治家、資本家、官憲の間のからくりを充分に見透して、一層强く〳〵團結して、あくまで不當の壓迫とたゝかふ決心をかためなければならないと思ふ。

　新聞紙の傳へるところに依ると、政府は、この運動が益々全國的になつてゆくことに鑑みて、電氣事業法の改正を企てゝゐるといふ。これは、これまで電燈料金は會社側からの屆出さへあれば幾ら徴收してもよかつたものを、一旦取調べてから認可する方針にする案で、來議會にはこの案が提出されるだらうとのことである。とにかく、これだけのことでも、大衆運動に依つて、政府の反省をうながした事實を、われ〳〵は自負して進まねばならぬ。そしてもつと〳〵われ〳〵の日常生活に於ける不滿をとりあげて、それの解決のために一致行動をとつて鬪ひたいものである。

醫者と産婆

　最近内務省衞生局の調べた處に依ると日本全國に亘つて實に一千八百町村の醫者も産婆も一人も住んでゐない處があるといふこと。

醫者のゐない町村――北海道四七、青森二四、岩手八九、宮城一〇、秋田一六、山形四〇、福島二四、茨城四八、栃木二四、群馬二一、千葉三一、東京一六、神奈川六、新潟　　、富山一三、石川一四、福井　二、山梨四三、長野四七岐阜一〇、靜岡一七、三重二三、滋賀一六、京都八、兵庫一〇、奈良二、和歌山四五、鳥取一二、島根三一、岡山四三、廣島三一、德島一一香川一〇、愛媛八、高知六、福岡一一〇、佐賀五、長崎一〇、熊本二三、大分三八、宮崎七、鹿兒島一九、沖繩八。

産婆のゐない町村――北海道一一九、岩手八九宮城五九、山形二五、福島六六、茨城六四、栃木五七、群馬六四、千葉三一、東京八、神奈川六、新潟一三、富山一三、石川六九、福井一二山梨一四八、長野七九、岐阜一五、靜岡三六、三重一三、滋賀三〇、京都一六〇、奈良一〇、和歌山四八、鳥取五〇、島根三六、岡山四一、廣島六三、德島六二、香川二一、愛媛八、高知一〇、福岡一九、佐賀五、長崎五八、熊本五七大分一一七、宮崎五、鹿兒島五二、沖繩二二(時事新報より)

　さすがに内務省でも驚きあきれて、かうした未開の地にも、醫療機關を充實させるために豫算を組んで次の議會に提出する運びになつたといふことである。

　ところで都會に住むわれ〳〵は、これとは全く反對な現象に苦しめられてゐる

即ち、醫者も産婆も多すぎることで、何れを玉とも瓦とも斷定出來ないでゐて、而も、そのどれもこれもが全くの營利商賣で、藥九層倍のたとへの通り、われわれから暴利に近い高い診察料と藥價とをとりたてゝゐる。

平素、丈夫に働いてゐても、家族の者の口を糊するだけが精一杯の一般の人たちにとつては、せめて病氣の時や怪我をしたときには國營の療養所にて萬民平等の手篤い看護をうけて充分な醫藥をうけたい、といふことが痛切な願ひである。そして婦人としてのわれ〳〵がわけて願しいことは、子を産むときに充分な手當と保護をうけられる樣な社會的な機關が一日も早く出來てほしいと云ふことである。

何ごとも金子萬能の今の世の中では相當の金子を準備しなければ子を生むことも出來ない——金子がないために、みすみすその母體を殺し、嬰兒を殺してしまふ場合が今日どんなに多いか知れないのだ——然し、從來のやうに、子供が生れるといふ事についての一切の責任と負擔をその兩親のかぼそい四本の腕に委せきりといふことは何と云つても不合理である。

母たる婦人が、子供を生みこれを育てるといふことのこの大きな仕事のもつ社會的意義に目ざめて、母及び生れ出づべき子供の保護を社會こそ第一番に行ふべきであることについて、婦人全體が聲を一つにして機會のある毎に鬪ひ進みたいと思ふ。

米がたかい

米がたかい。

とん〳〵米價が騰つて、まさに天井しらずの暴騰であります。七月末から一ケ月ほどの間に十五キロ（一斗六合）につき八十錢がた高くなつた。八月初め、十月渡しのものが二十八圓臺であつたのに九月一日には、三十三圓に上り、同月五日には三十七圓に上つて、つひに取引所は立會の一時的中止までしなければならない波目になつたのであつた。

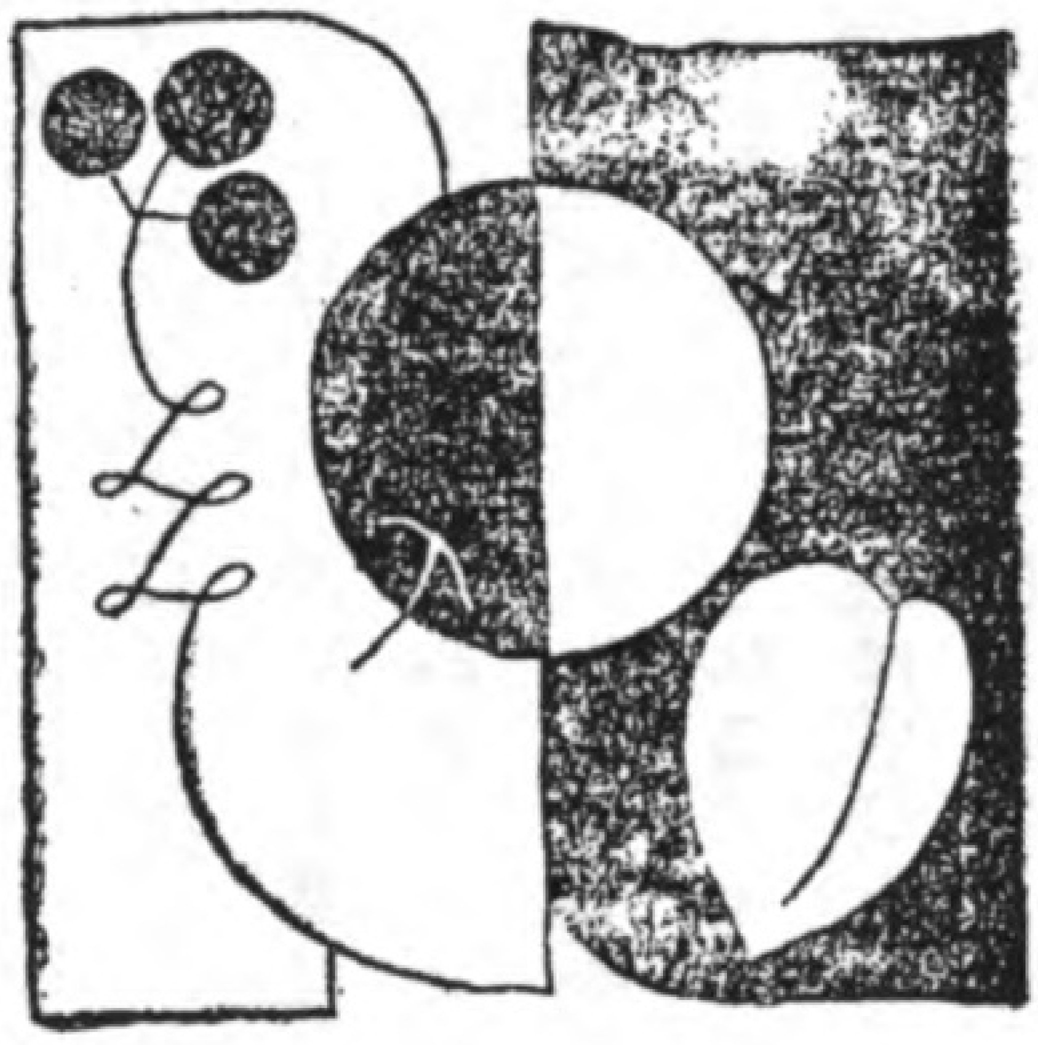
もうそろ〳〵新米が出やうとしてゐる此の際に何故米がこんなにも騰つたのであろうか。消費者としての我々が考へなくてはならないのはこの點である。確かな筋から聞いた處に依ると、政府筋の有力者某々が、大々的な米の買占めをやつたからだといふことであるが、その理由は素人のわれ〳〵にも明らかである。卽ち、今年は天候が惡かつたからきつと大減收に違いない、今の內に買占めてその內値が出たら賣離してうんと儲やうとす

る思惑が働いたので、それに、政友會は地方の地主を地盤としてゐると稱せられてゐる政黨である。小作人や小地主には今頃まで手持の米があるわけもないけれど、大地主は、新米が出盛からぬ今の內に早く賣離してしまはねばならぬ、去年の米を多量に藏ひ込んでゐる筈である。この急いで賣離したがつてゐる大地主の持ち米を高値に賣らせやうと方法をとつたなら、大地主共は益々政友會さま樣で我黨萬歲と來るのは明りきつた話であろう。かういふ政治的なからくりで、米の買占めが大々的に行はれた。そしてその結果、われ〱は高い米を食はなくてはならなくなつたのである。

或專問家の話に依ると、日本で凡そ五千八百萬石の米がとれる。そして日本の內地で食べる米の量はざつと六千三百五十萬石といふのであるから、結局五百萬石といふ差額の米を、毎年外國米とか朝鮮米とかの輸入で補つてゐるわけである今年のやうに全國を通じて天候不順のときには、さぞ米はひどい減收だろうと一般には考へられるものであるが、全國的に見れば年々さう大した增減がない由であるから、天候の如何はさう米價の騰落に重大な關係を及ぼすものでないさうである。

米價の騰落を決定的に支配する有力なものは、實に米穀取引所の相場である。相場師が、高くなるのを見込んで買占めを行ひ（高くなつたとき一時に賣拂つて大儲けをする）安くなるのを見込んで賣離す（ぐつと安くなつてから買ひ戾すとその間の差額が儲けになるのだ）ばくちをしてゐるそのバネ仕掛けで、一日として缺くことの出來ないわれ〱の米の値が取りきめられてゐるのである。

米の如き日常の必需品にかういふからくりがつきまとうてゐると、一般の者がます〱高い米を食べなくてはならなくなり一方には、米を上げたり下げたりする事に依つて私腹をこやしてゐる人間がゐるといふこの不合理に對して消費者としての婦人は安い米を食べさせよ！と、腹一杯の力で抗爭しなければならぬ。



各國職業婦人保護法に就て

（六月三十日職業婦人協會第一回懇談會に於ける講演要旨）

北岡壽逸

今度みなさんの御盡力で、職業婦人協會が出來たそうでありまして、私は衷心よりその健全なる發展を希望するものであります。私は、我國に於ける職業婦人の社會的經濟的地位の向上と云ふことは、婦人自身のために必要であるのみならず、人類の他の一半をなす男子の幸福と品性の向上の爲に、更に社會全體の爲に必要であると信じて居るもので御座いまして、この意義よりして職業婦人協會の爲に何か役に立つことがあれば喜んで犬馬の勞に服し度いと思つて居るのであります。と云つて別にこれと云ふ能力もないので、本協會の一事業となるべき、立法要求運動の一參考にもと、諸外國に於ける職業婦人の保護に關する御話を申上げ度いと思ひます。

先第一に職業婦人と云ふ語は種々の意味に用ひられます。狹い意味では、婦人の智識勞働者と云ふ意味にとられます。廣い意味では營利活動を爲す一切の婦人を含みます。職業婦人協會に御集りの方々を中心として云へば、狹い意味にとつた方がいゝと思ひますが、私が我國に於て保護方法の必要の特に緊切と考へられますのは寧ろ廣い意味の職業婦人の方に屬する樣でありますから、其の方に付ても御話を申上ます。

廣義の職業婦人、婦人勞働者を種類に依つて分けて見ますと、先づ第一には獨立して營業をなし又は其の助手たるもので、小自作農、小作農、小賣商等をなす婦人であります。養蠶茶摘の如きものをも含みます。勞働に從事する婦人として

は我國では一番多いでせうが、之れに關する保護立法は外國にも餘りありませんから省きます。

第二の種類は被傭勞働者で、此れは範圍は頗る廣く(一)農業勞働者、(二)鑛業及工場勞働者、(三)交通通信勞働者、(四)商店事務所從業者、(五)旅館料理店カフエーの給仕等の接客業者、(六)家庭勞働者即ち女中等に分つことが出來ます。此の中一番重大なのは鑛業及工場の勞働者でありますが、此は我國にも既に鑛業法、工場法があり、現行法は不完全ではありますが、漸次改正せられつゝあるのでありますから、今日の話からは省きます。又農業勞働者も特殊の部分でありますから省きます。其の他の者は交通通信勞働者としては電話交換手、自働車運轉手、商店事務所(役所を含む)從業者としてはタイピスト女事務員、計算人、販賣員、賣子等でありまして何れも職業婦人として重要なるものであります。旅館料理店の給仕及女中は所謂「住込」と稱して雇主の方に寢食をするのが多いのでありまして、單に勞働時間中のみでなく、私生活迄も雇主の制限を受けるか又は勞働時間が恐ろしく長いのでありまして、普通の意味の職業婦人の中には入りませんが、私は我國に於て保護立法を要する最も著しきものと考へて居ますから本日は是等に就ても御話申上度いのであります

勞働婦人の第三の範疇に入つて來るのは家內勞働者又は賃仕事をなす人々で、家に居乍ら肉體勞働に從事する人々であります。外國に於ては此の家內勞働に付ては工場鑛山勞働者に次で保護立法が發達して居るのであります。我國に於ても極めて必要であります。第四の種類は自由職業又は專門的智識勞働者とも云ふべきもので教師、官吏、醫師、產婆、音樂家、新聞記者、文藝家、宣教師、女優、女師匠等で、將來は女辯護士の如きものも現れるでせう。此の自由職業と云ふものは勤勞階級としては一番幸福なもので、大體に於て職業が單なる衣食のためでなく趣味であり使命であつて、職業に對して一種の誇りを以つて居るのを通例とします。加之、收入も相當多く、時間に餘裕もあり且自由であります。從つて此の種のものには保護立法と云ふが如きものは取り立てゝ云ふ程のものはありません。第五に特殊の婦人勞働者があります其は藝娼妓及私娼で、私は日本に於ける此の種の人々を救ふことは彼等の爲に、將又社會全體の爲に極めて必要なことで私は或時期に於て之が爲に身命を投げ打つて奮闘するときが來るかと思ふのでありますが、單なる婦人勞働者でありませ

んから今日の話からは除きます。要するに本日は商店事務所の從業者、通信運輸勞働者、女中、女給、家內勞働者と云ふが如きものを主として之等に關する保護立法の概要を御話申上ます。

其の前に婦人勞働發達の原因、婦人勞働に對する根本政策として放任論、禁止論、改善論等を述べるのが順序でありますが、婦人勞働の原因としては長い沿革あり、資本主義あり婦人解放運動あり、結婚難あり、種々の原因があつて中々簡單ではありません。又放任論、禁止論、改善論凡て、保守的の考へから來るものと急進主義、社會主義的考へから見るものと、種々ありまして詳論する暇も御座いません。唯私の考へて居ます結論を申上げるならば、私は通常女としては戀を得て結婚して夫が充分の能力があつて、女は妻として子を育て、夫を愛して居れば一番いゝと思ひます。其の意味に於て、職業よりも戀愛と、母性愛とを尊重します。唯神樣の意地惡か無能か何か知りませんが、此の世の中に於て幸福なる戀を得、母性愛に浸ることの出來ない人が多い。此場合に經濟的獨立の得られる職業がなかつたならば、名のみの家庭にして實は奴隸であり、娼婦であるが如き生活にも讓歩しなければならぬ。斯くの如きは婦人に取つて汚辱であり、悲慘であるのみならず、男子にとつても不幸でありますが故に、戀を得ず、母性愛を惠まれざる人に次善の生活手段として婦人職業と云ふものが無くてはならないと思ひます。其の他に結婚迄の數年の敎養又は生活手段として、家庭生活の餘業として、婦人職業生活があつていゝことは云ふ迄もありません。是等種々の理由から職業を求める婦人に對して、其の職業は天國の如く非常に幸福なるものならずとも、文明の最低限を下ることなき丈けは法律で保障する必要があります。各國のは現行法到底充分と云ふ譯には參りませんが、我國將來の進路に對して種々暗示するものがあります。

勞働者保護として先第一に必要な事項は、勞働時間の制限であります。是は衞生上又人間としての敎養及易樂に必要なる餘暇を與へると云ふ點から必要であり法律に依つて取扱ふに一番適した問題であります。御存じの通り歐米に於ては工場鑛山に於ては大體に於て原則として勞働時間は一日八時間となつて居りますが、工場鑛山の外、商店事務所等にも法律を以て八時間に制限して居る國が隨分あります。商店に就ては營業時間を午前の八時か九時から午後の五時乃至七時迄に

制限し、其の中に於て一時間乃至二時間の晝休の時間を設けて居ります。此は各國各地方で可なり區々で種々例外もありますが日本の一般小賣商店の如き無制限なる營業を認めて居る國は外國にはありません。日本の商店の營業時間制限は我國勞働立法の急務の一でせう。一般の八時間勞働の普及に伴つて、智識勞働者の勞働時間は六時間に制限すべしと云ふ要求が可なり強く、ロシヤでは法律で一般勞働者は一日八時間夜業は七時間、地下勞働及智識勞働者は六時間と制限してあります。ノルウエー等でも智識勞働者の勞働時間は午前九時から午後三時迄となつて居るそうです。

一日の勞働時間制限の外に土曜の半休、日曜の休日制は各國に於て廣く行はれて居ます。是丈は我國でも智識勞働者の關する限りでは相當廣く行はれて居りますが、小賣商店の全然無制限なのは甚しき缺陷だと思ひます。日曜休日の外一年に二週間前後賃銀を受け乍ら休暇をとる權利を認められることは、此れは工場鑛山の肉體勞働者には稀な事例ですが、智的勞働者には相當廣く行はれて居ます。然し是は法律ではなく慣例で定まつて居るのが通例であります。

我國に於て勞働時間の不規律で矢鱈に長いのは旣に擧げた小賣商店の外に、家庭勞働者卽ち女中でありますが、此に對しても外國には種々の保護規定があります。例へばオーストリアの家庭勞働者法を見ますと、原則として午後の九時から朝六時迄、十六才未滿の者は午後の八時から朝の七時迄は使つてはならぬ。其の外に晝に二時間、（十六才未滿の者には三時間）の休憩を與へなければならぬ。日曜日には八時間、其の外に一週一日四時間の休みを與へて、外出の自由を認めることゝなつてゐます。尤も家族の病氣其の他特に必要のある場合には例外がありますが、其の代り其には特別手當を支給することになつて居ます。又日曜に使つた場合には代りの休みを與へなければならぬのであります。我國の現狀とは大分異る樣であります。

次に賃銀の保護であります。卽ち最低賃銀制度の問題があります。是は智識勞働者と云はず、肉體勞働者と云はず、勞働者の生活上一番緊切な問題でありますが、法律に規定することは種々困難な事情がありますので各國の法律は種々雜多になつて居ります。茲に其の一々に付て詳論する暇も御座いませんが、各國最低賃銀法の精神を見ますると、根本原則としては最低生活の出來ない賃銀で人を傭つてはならないと云

ふことでありまして、其の比較的完全なる法制は濠洲に於て定期に最低生活費を調査して之を宣言すること、其の金額以下では傭入るゝことを得ないと云ふ法律があります。米國各州にも同様の主旨で最低生活費を調べ、其の以下に傭入るゝ事を禁じて居ます。米國のは婦人勞働者にのみ適用があります。其の金額は各州區々ですが、一週十四五弗、邦貨に換算して月百二三十圓程度が通例であります。一體、人を使つて飯の食へない様な賃銀を拂ふと云ふ事は怪しからぬ話で、又經濟學者の説に依ると、勞働者の賃銀と云ふものは其の最低生活費に依つて定まると云ひます。何となればそれ以下では勞働者が乾干しになつてしまつて働く人が無くなつて、又賃銀が上ると云ふのであります。處が實際に於ては、生活の出來ない賃銀で働いて居る人が世の中に澤山あります。その主なる理由は世の中には賃銀丈で自己の生活を維持せず、一部他人から扶養を受け、又は賃銀は「御小遣取り」と云つた様な人が居る爲に、賃銀丈で生活を支へなければならない人も「小遣取り」の人々に押されて、自然賃銀が下つてしまふ爲でありまして、是は特に婦人勞働者、就中、家內勞働者と、中流階級の多い智的勞働、職業婦人と稱せられる人の中に多いのであります。斯くの如く一方賃銀をホンの生活費の一部として甘んじて居る人々の承諾する賃銀が、賃銀のみに依つて生活する人々の賃銀を支配するといふことは誠に不都合な話で、之がために婦人の德操の墮落と云ふ事も起りますので最低生活費以下の賃銀を禁止すると云ふことは誠に必要なる制度と思ふのであります。所が實際に於て生活費と云ふものは非常に彈力性のあるもので、そうはつきり決まるものではありません。其爲め歐洲諸國では最低賃銀を生活費調査と云ふが如きものにおくことなく、「當該事業に於て支拂ひ得る賃銀」とか「當該地方當該事業に於て評判の良い雇主の支拂ふ賃銀」とか云ふが如きものを標準として居ます。これを決定するために雇主側を代表するもの、勞働者を代表するもの、公平なる第三者又は官憲を代表するものを以て委員會を設けるのが通例であります。之に依つて雇主が勞働者の弱みに付け込んで不當に廉い賃銀を以て人を傭ふことを禁じやうとするのであります。之は主として、歐洲では家內勞働者殊に婦人家內勞働者に適用があるのでありますが、商業勞働者に最低賃銀を定めた立法例もあります。

婦人の賃銀保護に關して問題となることは「同一の仕事に

は男女同一の賃銀を支拂ふべし」と云ふ原則であります。是は國際勞働條約等にもあります、歐洲諸國でも一部では行はれて居ります。然も現在一般の社會の慣例として、男は妻子を扶養するの責任があり、女子は多くの場合かゝる責任なきに拘らず、同じ仕事をするから同じ賃銀を支拂ふべしと云ふことは勝手な要求で、私は之は採るに足らぬと思ひます。然も一體現在の賃銀が、家族扶養の責任のある人にも、かゝる責任のない獨身者にも同一の仕事には同一賃銀を支拂つて居るのが頗る不合理な話で、賃銀を普通の賃銀と家族手當とに分けるべきであるとの主張及運動がありまするが、かゝる制度の出來た暁ならば、男女同一の賃銀と云ふことは正當であります。

勞働時間と賃銀以外に於て、婦人勞働者の保護上必要なこととしては第一に就業場の衛生的施設と云ふことであります。商店事務所の一人當りの廣さに付き最少限度を定めるとか、採光換氣を良くし、電燈の明るさを一定限度以上にすることを命ずるが如き、或は商店賣子の如き立つて仕事をする者に仕事の閑暇に坐ることの出來る様、各人に軟い椅子の備付を命ずるとか、便所化粧室の强制と云ふが如きものでありまして、是等は特に婦人に就て規定を設けた事例が多いのであります。更に寄宿舍に收容せられるもの及女中、給仕の如き雇主の家に住込むものに付ては作業場所の外、居住食事に關する保護規定が極めて必要でありまして、各國には種々の規定があります。例へば女中の寢室には必ず窓が無ければならぬとか、女中の食事は家族と同様でなければならぬと云ふが如き規定が、墺太利の家庭勞働法にありますが、我國に於ても必要な規定と思ひます。

又出産の場合には産前産後各六週間の休業を認めることは各國の通例であります。病氣の場合に就ては一般勞働者は社會保護に加入するのが通例でありますが家庭勞働者に就ては雇主に二週間とか一ケ月とかの間休養せしめ且療養手當を加ふる責任を課してゐます。此の點に於ても我國の如き病氣になつたからすぐ親元に引取らせて省みないといふやうなことは甚だ遲れた勞働者に不親切な制度だと思ひます。

最後に婦人勞働者特有の問題として考慮を要するのは風規の問題で、之は勞働者保護法の外にあるものが多いのでありますが、勞働者保護法の中にあるものに就いていへば、料理店に於て女子を給仕に使用する事を禁ずるとか、又は就業時

間を午後八時とか九時とかに制限するとか、住込婦人勞働者の寢室は內部から鍵のかゝる樣にしておくことを强制するとか、雇主の家に住込む未成年(十八才未滿)の女子に付ては貞操保護の責任を雇主に負はせんと云ふが如き法規でありまして、何れも我國に採用を痛感するものであります。固より婦人の風規維持及相手の選擇を過つて捨てられた女の救濟保護と云ふ問題に付ては、民法の運動の問題に歸すること多く、此の點に於て最も完全に近いのは米國でありまして、米國では、一度性的關係を結んだ女に對して結婚を肯じない男は其の女の一生を扶養するが如き莫大なる損害賠償と慰謝料とをとられる事になつてゐます。我國の如き男子の品行の放埒にして無責任なる國に於ては、斯くの如き法制を採用することに依つて、少く共、幾分男子をして責任を知らしめ背德漢を應懲することが出來ると思ひます。私は製糸工場の女工や會社商店の女事務員が輕薄な男子の毒牙にかゝつた場合に、多くは泣寢入りになつて、時として自殺するといふ如き事實を見聞する每に、彼等女子の淺見無智もさることと乍ら、我國の社會が、男子に對して責任を負はせることの輕きを痛感するのであります。此の點は勞働法とはやゝ離れますが、勞働法の領域に於ては雇傭關係上優越なる地位にある男子が、其の地位を利用して女子の貞操を蹂躪したるが如き場合には、特に重い責任を負はせることが必要と思ひます。

甚だ廣い範圍に亘る問題を短い頁に埋めた爲めに不完全な話となりましたが、終りに臨んで一言申上度いことは、職業婦人の地位の向上と云ふことが、法律に依る場合でも、法律外の方法に依る場合でも常に必要なことは其の背後に勢力のある團體の要求及支持と云ふことでありまして、かゝる團體がなく、凡ての保護施設を官僚や所謂識者に一任しておいたのでは、其の發達が頗る遲いことを覺悟しなければならぬと云ふことであります。此の意義に於て職業婦人協會と云ふが如きものゝ發達を希望する譯でありますが、同時に此の種の團體に對して一言私の希望を申上げれば、婦人の團體と云ふものは、經濟的地位の向上とか、階級鬪爭と云ふが如きことのみを共の仕事としてはならない。やはり趣味、社交、教養と云ふが如きことを集團の重要な中心としなければ、人々を多數集めて社會的に勢力を持つことが困難であろうと思ひます鬪爭的精神のみを刺戟して女子として、又、人として大切なる心情を失はしむることなき樣餘計なことかも知れませんが私見を一言申述べておきます。

普通選擧の精神を蹂躪する小選擧區制に反對せよ

赤松明子

最近に於ける無產政黨の著しい政治的進出に脅威を感じたゝめかどうかは知らないが、小選擧區制復活の聲が有產諸政黨の間にちらほら頭をもちあげて來た。先づその火蓋を切つたともいふべきものは、去る八月一日の夕刊に現はれた床次竹次郎氏の新黨樹立の聲明書の一節である。彼は曰く(前略)かくの如き政局の不安は必ずしも議會の解散によつて一掃し整理し得べきものにあらず、眞に基礎强固なる政黨政治を行はんと欲せば宜しく現行選擧制度を改正して小選擧區制に還元するに非ずんば、到底政局の安定を期し能はざるを信ず。(後略)と。

床次氏が民政黨を脫黨した裏には、現政府の醜い魔手が動いてゐるとか、床次氏と政友會との間には或種の默契が成立したとか種々取さたされてゐたが、恰もそれを裏書きするかの如く、最近に至り政府は現行選擧法の中選擧區制を小選擧區制に改正する選擧區制改正案を來議會に提出する意嚮を示した。政府が小選擧區制の還元を企圖したに就いては、一面において將來新黨との提携を策する方便としても速かにこれを具體化する必要を感じたゝめであるが、更に重要なことは今春の總選擧の結果、輕視することの出來ぬ新興勢力の擡頭に備へるためには小選擧區制が最も有利なことを痛感したゝめであると思はれる。

しかし現在のところでは、この改正問題は行政審議會幹事會の研究題目たるに止つてゐるので、今後我々は大いに輿論の力によつてこれが實現を阻止しなければならないけれども實際問題として最も私共の注目を惹いてゐるのは八幡市の小選擧區制問題である。

八幡市の小選擧區制問題に就いて云へば、八幡市會は明年四月の改選期を前に控へてゐる去る八月二十三日、政友、民政兩派が一致して、無産政黨の進出を防遏するために、突如として同市內を六ケ所の小選擧區內に分つ選擧條例設立を議決し、內務省にそれが認可を申請して來た。之れに對し無産黨側は猛烈な反對運動を開始した。社會民衆黨八幡支部では三十日宮原松尾兩氏が上京して黨本部に事情を訴へたので、本部では三十日午後五時より中央執行委員會を開き協議の結果左の聲明書を發表した。

「普選第一回の總選擧に當り無産政黨の進出に驚いた八幡市會に於ける政友民政議員は、長年の敵意を棄てゝ市政公新會なる政團を組織し、明年四月の普選による市會改選のための選擧名簿作成の時期を前にし、突如として全市を六區に分つの小選擧區條例を可決し、市長、市會議長は急遽上京して內相に認可申請中である。斯くの如き小都市にして小選擧區制を布かんとするは、從來の議場に更に干渉と黃金とを以つて選擧を汚濁せんとする唾棄すべき動機より出でたる事は明白である。吾等は之を以て地方ブルジョアの無産階級に對する積極的攻勢の尖鋭化されたるものであり、衆議院議員選擧を小選擧區制の下に行はんとするの策動と共に無産階級の進出を阻止せんとする既成政黨の陰謀の一表現と斷ずる。吾等は大衆と共に全力を盡して斯くの如き時代逆行の本案の一蹴を期するものなる事を聲明す」

更に社會民衆黨ではこの聲明書を發表してその反對態度を明らかにすると共に、翌三十一日龜井代議士、八幡支部の宮原松尾の三氏は先づ內務省に佐上地方局長を訪れ反對意見を開陳せるに對して、同局長は「問題は頗る重要であつて、全市民の納得を要することゝ思ふ。且つそれは必ずしも九月十五日の名簿作製期までに決定せねばならぬわけではないから本省としては充分愼重に研究する」旨答へた。次で三氏は同日午後三時內相官邸に望月內相を訪れその意向を質したるに對し、內相は「先般圖師八幡市長が上京し認可申請があつたが、何分重大な問題であるから當局としては市會の決議を尊重することは勿論であるが、之を認可するか否かは大いに研究を要することである。從つて市長の申請は單に陳情として聞き置くに止める旨を答へてをいた次第である」との回答を與へた。

無産黨側はこれらの回答に勢を得て、なほも猛運動を續行

した結果、市民の反對陳情書一萬三千通を得るに至つたので九月十四日午後三時半社會民衆黨の龜井外數氏は之れを携へて內務省に佐上地方局長及び安井行政課長を訪問の上之れを提示し、再度內務省側の意向を質し、大體滿足の答を得て會見を終つた。

斯くの如く內務省側の意向は大體に於て愼重主義であるが望月內相が或る場合に言明したやうに「急激なる變化は不可であるが」といふ言葉のかげには徐々に變化するのならば差支へないといふ意味が含まれているのであつて、內務省側の實際の腹は、一度び現案を撤回せしめた後、兩者の中間をとつた四區乃至五區程度の代案を議決せしめ、再申請を爲さしめた上許可を與へるのではないかとみられてゐる。

さて小選擧區制は何故わるいかといへば、第一に小選擧區制は普選の精神を蹂躪するものであるから私達は絕對に之れに反對しなければならぬ。抑々國民が普選を要望したのは、從來有產諸政黨によつて壟斷されてゐた政治に汎く一般民衆が參與するためではなかつたか。また代議制の根本精神はひろく民意を代表する點にあるのではないか。然らばひろく民意を代表する代議士を得るには、先づ以つて落選(棄權者を除く)によつて生ずる不代表投票を最少にするための工夫を必要とする。若し一選擧區一人制の如き小選擧區制をとつたとするならば、約五割近くの不代表投票を生ずるであらう。これが三人四人の候補者の亂鬪する場合には、その不代表投票の割合は更に六割七割の多くに上る。斯くの如くして選出された代議士が果してひろく民意を代表する代議士と云ひ得るであらうか。且つ斯くの如き制度に於ては大政黨が常に有利であつて、新興勢力の如きはある特種の選擧區を除いては非常にその發展を阻害される場合が多い。

斯くの如く小選擧區制の弊害は、少數代表の政治を招來し新興勢力の發展を阻害するのみに止まらず、時の政府の權力の橫行をほしいまゝならしめる。且つ運動區域が非常に狹いために黃金の力と因緣情實の魔手が容易に活動し得ることになる。その結果、小選擧區制ではその土地に因緣のある常日頃からこまめに地方問題に世話をやいてはゐるが、國家的に見て大した人物でもないやうなものが當選し、實際に國家の政治に有用な人物が落選する傾向のあることは否み難い事實である。去る六月に行はれた東京、神奈川の府縣會議員選擧に於て、無產黨候補者の當選數が豫想以上に少かつたのは、

大部分右の原因によるのであつたことを考へれば、思ひなかばに過ぐるものがある。

しかし小選擧區制を主張するものは、現行中選擧區制の弊害を數へ上げていふには、一、中選擧區制は費用を過大に要す、二、同派の候補者を立てる時地盤協定が困難であり、從つて共倒れと或は時に過大得票の恐がある、三、僅かに一ケ月の短期間に候補者の政見を選擧區の隅々まで徹底せしむるには選擧區が餘りに廣い、等々である。これらは或る程度まで事實であり、殊に無產政黨の如く極少の選擧費用をもつて選擧運動をしなければならないものにとつては選擧費の最低限度の縮少は是非實行せしめねばならないことである。それには立會演說の外一切の宣傳を禁止し、立候補の宣言政見發表の如きは選擧事務取扱官廳に於て一纏めとし、唯だ一回官廳の手を以つて有權者に配布するに止めるやうに選擧法を改正すべきである。また第二の缺點に就いては大選擧區比例代表法の採用がこの缺點を補つてあまりあるものであらう。

かく考へる時、床次氏や政友會が、政局の安定を得んがために小選擧區制への還元を唱道するといふのは一種の口實であつて、その眞意は、最近著しき政治的進出を示して來た新興無產政黨の前途を抑壓し、有產政黨の政治的壟斷の夢を一日も長くむさぼらんとするにあることを決して忘れてはならぬ。(九月十五日)

ストックホルムに於ける

消費組合婦人の國際會議

西川三郎

◇

國際的進出！　各國の婦人消費組合ギルドは、かなりの感激を以て、第三回の國際婦人消費組合會議を迎へたらしい。この會議は昨年國際協同組合同盟の會議に先きだつこと二日前、八月十二日、十三日の兩日にわたつて、ストックホルムで開かれたもので、既に一ケ年を經過して多少昔物語の氣味がないでもないが、其處に取扱はれた問題は、なほ依然として新しいし、訓へられることもまた少くないやうに思はれるので、こゝに紹介の筆をとることにした。

會議に集つたものは、この國際ギルドに加盟してゐる國よりの代表者一五三名、即ち瑞典一〇七名、英蘭二七名、諾威九名、チエツコスロバキア四名、瑞西二名並墺地利、白耳義愛蘭、スコツトランドより各一名であつて、また國際ギルドに加盟してゐないフインランド外五ケ國よりも消費組合婦人の出席があつたが、これは討議に參加することが出來るのみで、議決權は持つてゐない。尚ほこの會議にその代表者を送つたものは、國際勞働局、國際平和局、世界エスペラント協會、非戰者インターナショナル、國際婦人平和自由聯盟、國際婦人參政權同盟、瑞典婦人勞働組合等であつた。

◇

この會議に於て、種々重要なことが研究討議せられ、決議せられたが、要約すれば左の三事項である。

一、消費組合自身に關すること。

二、家庭勞働並純正食料に關すること。

三、世界平和に關すること。

第一種の議案は瑞典より提出せられた「低廉な價格か高率

な配當か」である。この問題は、消費組合を經營する上に頗る重要性を帶びるものであつて、未だ組合意識の淺い一般組合員を組合に近づかしめるのも、組合から遠ざからしめるのも、總てこの價格政策の如何に因るものである。獨英ほか數ケ國の代表に依つて論議が鬪はされたことも當然である。

この問題に就いての決議は、先づ價格に對する消費組合の勢力の增加に就いて滿足の意を表はし、食料及び他の必需品に對する低廉の價格は主婦の仕事をある度迄容易ならしむるものであるが、消費組合運動は、總ての婦人が忠實な組合員として、その購買力を一つにまとめるときに於てのみ初めて國內的にまた國際的に價格の統制を爲し得るものであると云ひ、更に、組合の剩餘金の一部を購買高に應じた配當の形式で配分する制度を是認して、配當の標準に就て種々の注意を與へ、そして最後に、婦人が次のことを理解するやうにその敎育事業を向けるやう、各國の消費組合婦人の組織に向つて求めてゐる。

一、價格と配當、購買と配當との關係。

二、各國の經濟事情が配當と價格の上にどんなに影響するか。

三、組合運動が價格の上に、從てまた生活の標準の上に、決定的統制を行ひ得る力を得るやうに、組合の取引を增加するやう配當を爲す必要。

本邦の消費組合は、概して價格政策に於ては、所謂折衷主義を採つてゐる。市價よりは安く、出來得るならばまた配當をも爲さうと云ふのである。だが組合の實際の價格は、市價よりはそれ程低いと云ふ程でもなく、また配當を爲し得るものも少いといふ狀態である。兎も角も發達階段に於て可なり低い所にある。

◇

會議の第二日は「家庭洗濯」の問題を以て始められた。それは要するに、消費組合や自治團體が、これに就いてどんなに助力することが出來るかといふことである。熱心な討論の後、數種の方法が決定せられたが、今は唯、決議の冒頭の言葉を左にかゝげて、國際婦人消費組合ギルドの意のあるところを知るに止めておく。

「國際消費組合運動に於て組織せられた主婦並びに母を代表する國際婦人消費組合ギルドの會議は、家庭婦人をして、社會の生活に對して充分な貢獻を致さしむるためには、家事勞

働に勞力節約の機械を使用して、不必要な苦役から婦人を免れしむるにありと信ずるものである。」

家庭に於ける勞力節約の問題は何れの國、何れの社會に於ても充分考究さるべき重要なるものである。殊に、朝から晩まで臺所の雜役と針仕事に追はれてゐるわが邦婦人は、最も眞面目に研究すべきものではあるまいか。

次に、純正食料品の問題に就いての討議があつた。「僞惡」は資本主義制產業につきものである。消費組合婦人が、この純正食料保護政策をどう實行に移すかは興味のある問題である。

◇

會議の終りに取扱はれたものは世界平和の問題であつた。戰爭の否認は、國際協同組合同盟の傳統的精神であつて、之れに就いては、幾度かその會議に於て、最も眞面目に論議せられたものである。わが國際婦人ギルドも既に一九二四年のガン市の會議でこの問題を論議したが、今また玆に之れを取扱つたことは、消費組合婦人が如何に國際平和に對して熱烈な希望を懷いてゐるかを知ることが出來るのである。決議の大要は次の如くである。

「數百萬の勞働主婦及母を代表してゐる我が國際婦人消費組合會議は、歐洲及アジアに於て、世界の平和を脅かすやうな危險地帶の發達について深甚の注意を拂ふものである。會議は、協同組合が據つて立つところの總ての原則に背いてゐる戰爭に對して、飽くまでも消費組合婦人は反對であることを示すものである。

全世界の軍備撤廢なくしては、平和に對する永久の保障はあり得ぬと確信する。そして此の目的を以て活動しつゝある總ての他の組織と協力せんことを國民ギルドに對して勸告するものである。」

と云ひ、海軍々備縮少會議の決裂と、その準備委員會の失敗を深く遺憾とする旨を述べて、尙ほ進んで宣言してゐる。

「政策が陸海軍の武將に依つてでなく、民衆と商議する政治家に依つて決定せられない間は、効果ある軍備縮少への道へは一步も進まれない。そして、次の國際軍備縮少會議に全人類の半ばを占むる婦人の出席の保證を國際聯盟に求むるものである。」

この會議に續いて開かれた國際協同組合同盟の會議に於ても英蘭婦人消費組合ギルドのバートン夫人に依つて國際平和に

關しての決議案が提出されたが、可なりの討議の後この議案の最後の言葉「協同組合組織は、その理想の無制限の向上を維持せんがためには、宣戰布告及軍事行動に絶對的に反對する用意をしてゐる可きである」と云ふ言葉を削除して可決した。併し、來るべき會議に於ては更に力強き言葉を以て戰爭否認、世界平和の決議がされるであらう。

最近、世界主要の十五ケ國は不戰條約を結んで戰爭の國際的否認を爲した。だが、それは紙の上に於ける政治家の誓約である。無知の武將と利己的な資本家は何時でも之れを反古にすべく準備してゐる。そして民衆は、動もすれば彼等のうち振ふ魔の指揮棒に依つて、自らうたふ愛國の歌に、骸骨の踊りを踊るものだ。實際、幾百年來このかた、人類は血を見ては狂ふ獸であつたのだ。その血管のうちには、今なほ遠き昔の獸の血潮が流れてゐる。

世界恒久の平和の鍵は愛に輝く母性のみが之れを握つてゐる。「不戰」の二字を單なる文字に終らしむると否とは母性の覺悟の如何によるものだ。「戰爭否認」「國際平和」の溫き乳を膝の上の愛兒に哺ませて、傳はり來つた狂暴の血液を浄めねばならない。まことに、未來を支配するものはその胸に抱かれてゐる幼きものではないか。消費組合婦人が國際會議で、熱烈な感情を以て平和の道へと躍進しつゝ、世界の母性に向つて呼びかけてゐるのもまたこのためである。

◇

各國の「籠を手にせる婦人」は國際へと進んで行つた。そして、國際的勢力に依つて、組合組織に關した問題を、また家庭、總べての經濟、國際平和の問題を解決しやうとしてゐる。やがて我が消費組合婦人も同じ道を辿るのではあるまいか。

ストツクホルムの會議で取扱つた家庭勞力の節約問題、純正食料品の問題は勿論、總ての經濟問題は一國の政治と深き關係を有つてゐる。英國の消費組合が、多年奉じ來つた政治行動否認の傳統政策を棄てゝ政治行動をとるに至つたのもまたこの爲めである。經濟問題に、社會問題に漸く醒めて來たわが消費組合婦人が、政治行動の必要を痛感するのも餘り遠き將來ではあるまい。

そして「議會へ」「國際へ」

——————————————



わが身邊の記

奥むめお

原つばで干しものをしてゐたら、「犬がまつひついてゐるのが見えたからきつと奥さんだらうと思つてこちらへ來た」と云つて、Sさんが笑ひながら話しかけて來られた。

子供二人と犬一匹、これが近頃の私のお供である。朝起きたら、まだ明けきらぬ内に私たちは日の出る方へ向つて驅け走をする。よく晴れたまぶしいやうな日、草の上で杏一と犬はほこりまみれになつてころ〳〵とふざけてゐるのを私と紀伊ちゃんが見物役である。もう杏一の脊丈けほどに伸びて大きくなつた犬は、うしろから飛びついておんぶしたり、頭を越えて飛んだり相手が面喰ふほど、餘計に嬉しいやうにして悪ふざけをする。

然し紀伊ちゃんはさうゆかぬ第一、紀伊ちゃんは非常に潔癖やだから、犬の足で、自分の着物を汚されるのがきらいなのだ。それに近頃の紀伊ちゃんは犬のために、おち〳〵と遊んでもゐられぬほど心配で〳〵ならぬことが出來たのである。犬のために近頃紀伊ちゃんが隨分神經質になつたので、みんなが弱つてゐる。

それは、もう一ケ月程前の出來ごとであるが未だ鑑札をとつてゐない時分に、父ちゃんと紀伊ちゃんと犬と三人が散歩をしてゐたら、いつの間にか氣がついた時には、犬は犬殺しの綱に縛られてゐたといふのである。びつくりして戻して呉れる樣に交渉をしたが聞き入れられずとう〳〵交番まで來てしまつた。何しろ交番なんて、例の通り杓子定規のところだから、結局ケイサツへ行つて呉れと云ふのださうだ。

然し、紀伊ちゃんが聞かぬのだ。「紀伊ちゃんとこの犬だ、紀伊ちゃん處の犬をつれて行つてはいや！」と。まわりに集つた野次馬に父ちゃんが恥しくてならなかつたほど大きい聲で紀伊ちゃんがわめき立てるものだから、とう〳〵お巡りさんも仕樣ことなしに犬を戻して呉れたといふのである。

それからである。紀伊ちゃんは、交番の前へ決して犬をつれてゆかせぬ。幼稚園へゆくときでも、お友だちの家へあそびにゆく時でも、犬を玄關に入れて戸を閉めてからでないと決して、安心して出かけられぬらしいのである。

「母ちゃん、犬がお玄關にゐるからうらから出かけなさいよ」

と、お出かけの用意をしてゐる私に注意をするのも、もし母ちゃんについて犬が交番の方へ行つたら、お巡りさんにつれてゆかれてしまふかと心配だからであらう。

一ぺん、犬をつれて交番の前を通つてみたら納得がゆく筈なんだけれど、何しろ强情な子供だからそれが出來ないのである。

お巡りさんに犬を取られ樣とした時、餘程紀伊ちゃんはつらかつたと見えて、わめき立てたお巡りさんでも泣く子には勝てぬと見える。結局取戻したが、どんなにしても家に歸らうとしなかつたさうである。停車場の方を指して、

「貰つて來たお家へ、返して來て」

と云つて聞かないんださうである。うちぢうで用達しに出かける時など、犬獨りがルス番になると紀伊ちゃんはきつとムりを云つて私たちを困らせる。

「貰つて來たお家へ、返して來て——」

砧村より

らいてう



また秋が來た！　窓前の草野を渡る朝夕の風、今年は今になつてやつと夏が來たと人は口には言つてゐるものゝ、爭はれない確に秋だ。かうして郊外に住んでしみ〲と感じるのは年毎に繰返す季節の推移の正しさで、二百十日前後まだ暑い、暑いと汗をふいてゐる私どもを「おや」と叫ばせるのは百舌の聲だ。去年もあまりの突然さに驚いたが、今年もやつぱり驚かされた。一昨年烏山に住んでゐた時も同樣だつた。

家のぐるりの芒はもう穗が出そろつた。いつまん圓いお月樣がいらしつてもまごつきつこはない。林の中の栗もうつかりしてゐる間に、もう毬がはちきれさうになつてゐる、子供たちのポケツトからはこげ茶色のつや〲した粒がきつと三つや四つはころげ出す。學校歸りを栗取りに廻つて生栗をかぢり〲歸つてくる、これも每秋のことである。

兩隣りの空き地は芒にまざつて今野萩の眞盛りである。女郞花、男へし、われもこうなどは、はやすがれかけて來た。眞夏の偉觀だつた雜草の王、竹煮草は燒けこげてはゐるが、なほ堂々たる容姿でその中に立つてゐる。かうして自然は寸秒の休みもなく絕えず何事かを準備し、四季をり〲の楚々たる野の花を次々と咲かせては混迷の心に一點のともし火をつけてくれる。

近處にもらはれたチロ（うちの飼犬）の子が時々遊びに來てゐる。犬でもお母さんはいつ迄も忘れられないものと見える。もう今ではお母さんと同じほどの大きさになり乍ら、やつぱりお母さんを相手に一しきり庭の芝生の上でわるふざけをしなければおさまらない。チロの方でも我が子といふことを知つてゐればこそ、あゝもはしやぐのだらう。相撲をとつ

てころげ廻つたり、嚙みつきつこをしたり、駈けつこをしたり、やがて疲れると、そのまゝそこに何もかも抛げ出したといふ形でのび〳〵と寢そべり、親子とも〴〵午睡に入つてしまふ。大きなかまきりがお腹のあたりで異狀な鎌をふり上げてゐやうと、そんなことは知つたことではない。

この小犬が遊びにくると子供たちは遠くへやられた兄弟たちのことを思ひ出し、噂し合ふ。「お母さんに逢へないで可哀相ね、この犬ばつかりほんとに得してゐるわ」などゝもいふ。箱づめにされ、電車にのせられて中野の奧さんの御家へ貰はれて行つたアカ（こんな假名がつけられてゐた）のことを、「婦人運動」誌上で讀んだとき、子供たちは心から興がり、うれしがつた。殊に曙生（上の女の子）は我が子の噂をきく母の思ひに等しいものを感じたに相違ない。家内中で一番犬に冷淡だと子供たちから非難されてゐる私さへアカのあの人なつつこい姿がまざ〳〵と目に見えて可愛くもあり、おかしくもあつた。

曙生の小犬好きといつたらこれは又いさゝか度を越してゐる方で、まだ早い、早いと言つても眼もあかないうちから抱いて、頰ずりしたり、指頭を吸はせたり、ゆすぶりながら腕の中で眠らせたり、自分の寢床の中へ入れて腕枕でねかせて見たり、あらゆるしつゝこい愛撫をするけれど、小犬の方もそれをうるさがるどころか却てされるまゝになつてうれしがつてゐる。犬の兒は愛撫されるとおしつこを漏す癖があるので、よく手や着物にかけられるけれど「おや、又おしこをしたの、いけませんね」と微笑するだけで別段氣にもならないらしい。それに較べると男の兒の方は同じ可愛がつてもそれはむら氣で、永續しない。今抱いてゐたかと思ふと、すぐほうり出して仕舞ふ。おしつこなどかけられやうものならきたながつて大さわぎである。女の兒は學校から歸ると家にはゝいらずにすぐ庭の隅の犬小屋に行く。犬に夢中になつて時には御三時さへ忘れてゐるほどだが、男の兒はさうではない。玄關先から「歸りました。お母ちやんゐる？」と叫びながらはいつてきて、私の顏を先づ見、それから御三時を食べ、その上でなければ小犬を見に行かない。小犬に對するふたりの愛の差異を見る毎に、私はそれが強弱の相違でなく、寧ろ質的なものではないかといふやうな感じがしてならない。少女の上に既に現はれた本能的な母性愛の強烈さ。私はぢつと見てゐておそろしい氣がする時さへあつた。（七七頁へ續く）

無產黨代議士の歳費問題

水谷長三郎

僕は今年で辯護士を始めてから、ざつと四年九ケ月になる石の上にも三年といふ譬からいふと、故郷を控えた狹い京都では、どうなとかうなと、辯護士で食べてゆける域に達して居らなければウソだ。ところが、事實は反對であつて、今日此頃の僕の生活は極度に苦しい。人の家に棲んで丸る五年になり、初めて家賃を滯すやうになつた。

一體、俺の貧乏の原因は何んだ。それは俺が無產黨の議員であるからだ。今日、我國の無產政黨の現狀からいくと、さうして其の選擧原則からいくと、無產黨の代議士を一期ほどつとめるか、又一回選擧でもやると、大抵我等の陣營に於ける輝ける鬪士はくたばつてしまう。

僕の選擧費用の屆出は、五千なにがしになつてゐたと記憶する。さうして之れは、既成政黨の屆出とはちがつて、正眞正銘だ。僕以外の人々に當つて見ても當選した人々は、大抵僕よりも遙かに多く、落選した人々でも、相當に戰つた人々は、それ以上或はそれ位の金を費つてゐる。さうして其等の人々が、一、二の例外を省いては、皆こと〴〵くその日暮しその月暮しの貧乏人だ。だから、其の選擧費用は、みな血の出るやうなカネだ。

勿論、無產階級の候補者で、選擧に五千圓も、一萬圓も、費ふのが間違つてゐるといふ人がある。勿論僕も之れを痛感する。しかし、今日の選擧運動の如く、ポスター、文書が無制限に用ふることを許されてる制度の下では、言論戰一點ばりでも、それ丈位の金が費る。これは非常に歎はしいことだが、今日の事情止むを得ない。

ところが、いざ、代議士となつて見給へ。商賣なんか、やつてゐられないほど、いそがしい。僕は代議士になつてから辯護士としての收入は殆ど皆無だ。既成政黨の代議士には、

いろ〳〵の、カラクリがあらう。しかし、俺等の方では歳費以外に何等の收入がない。

其處で、此の歳費は、一體どうなつてゐるか。社民、日勞その他は知らず、舊勞農黨では、三千圓のうち、千八百圓まで本部に納めることになつてゐる。殘りの千二百圓の大部分は、所屬地方聯合會の費用に當てなければならぬ。此れでは無產黨代議士の唯一の收入である歳費が全然フイになつてしまふ。

無產黨代議士でも、やはり三度のメシは食つてゆかねばならぬ。その上、いざ地方の遊說になつても、いゝ所で、宿屋賃だけ拂つてくれる。大抵の處は、宿屋賃も此方持ちだ。汽車が、タヾだけでは生きてもゆかれねば、旅も出來ぬ。自然苦しい思ひをせねばならぬ。

供託金も本部持ち、選擧費用も、或る部分まで本部が持つといふ場合には、歳費の大半は、自分の懷に來なくてもいゝが今のやうな制度の下では、歳費の大半を取りあげることはあまりに殘酷だ。

こんなことを續けてゆくと、無產政黨は、とゞのつまり、親の脛をかぢつて理窟ばかり云ふ學生連中か、それとも理論の尖銳化で、自分のゆとりある生活をごまかす、プチ、ブルヂオアの物好きに壟斷されてしまふ。

これは非常に歎しいことだ。

——一九二八・九・一〇——

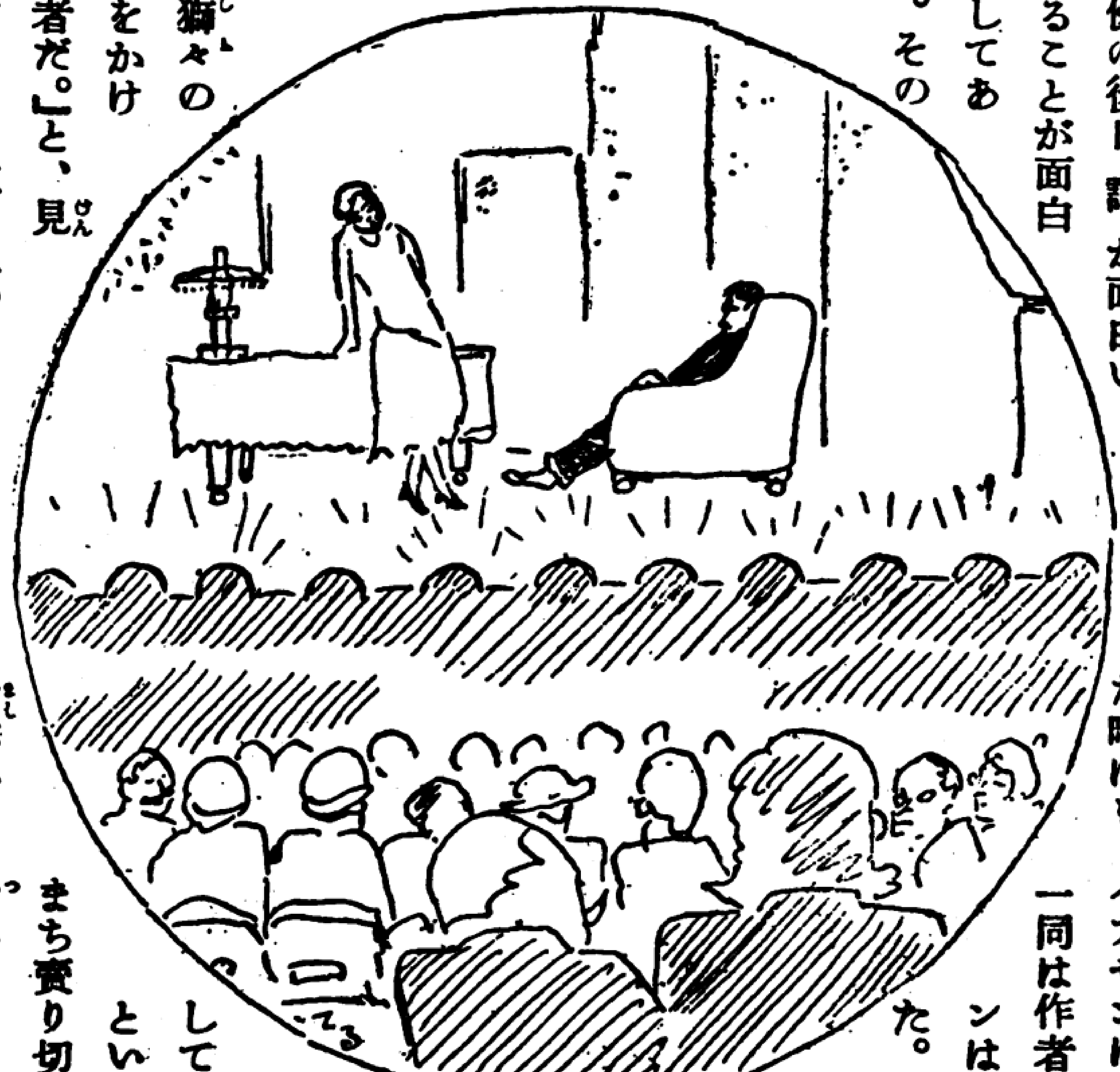
一つの仕事をなしとげやうとするとき、それを守り育てやうとする力と、それを叩き潰さうとするそれと同じ强さだけの力がどこからか加へられるものだ、といふ事を、私はいつも痛切に感じさせられてゐる。寂しいことだけれど今の人間の社會では仕方のない事であるらしいことに、私は諦らめをつけた。たゞ、さういふ力に、敗かされてはならぬと思ふ。實際の仕事の困難について何の責任も負はない樣な人が、えて、無責任な横槍を入れたがるものであるけれど、汗に汚れぬ白い手の妄評家どもを嗤つて返すだけの自信を、自分の仕事の困難さにつけても私たちは持つてゐたいものである。

せめて、同じ仕事の上に盟りを結んでゐる者同志だけは互ひに信じ合ひ、勵まし合つてゆきたいと思ふ。いゝと信じられる仕事だつたら、誰がしてゐやうと、どんな立場からでも、どんなに微力な加勢でも、つねに共同責任の上に立つて協力したいと思ふ。(奥)

ヘンリック・イプセンは久しい間ミユンヘンに住んでゐた。その當時毎々午後二時から三時まできまつて、カフエーマキシミリアンに出かけた。イプセンが來るといふので、わざ〳〵彼を見に來る客も尠くなかつた。ところが或時イプセンが旅行しに出た。そこで困つたのはカフエ、マキシミリアンの主人である。暫く考へた末に一策を案じて、俳優を一人雇つて來てイプセンそつくりに扮裝させ、二時から三時までノルウエの新聞を手に持たせていつもイプセンの腰掛ける椅子に座らせておいた。大家の顔をみて喜こぶ客が、「ハハア、今日もやつぱりイプセン先生が來てゐられる」と思つて、尊敬の視線を送つた。二三日かうして經つた。或る午後突然にドアがあいて本物のイプセンが入つて來て、何の氣なしにいつもの卓子のところへゆくと、自分が腰掛けて、ノルウエの新聞を讀んでゐた。イプセンはギヨツとした。『はて、どつちが本當の自分かしら』俳優はふと眼をあげるとこはそもいかに、イプセン先生が立つてゐられる。默つてこそこそ裏口から逃げ出した。よく己れに肖た奴もあるものだと思ひ乍らイプセンは平氣な顔をしてポケツトからノルウエの新聞を出して讀みはじめた。……



扨このイプセンに扮していくらかの小遣ひに有りついた俳優の後日譚が面白い。その男はイプセンになることが面白くなつてしまつた。そしてあとにアメリカに渡つた。そのうち、イプセンの名が愈々世界的となつて、アメリカでも屡々「人形の家」を初めとして作品が續々と上演せられた。すると、アメリカ各地でイプセン劇が上演せられる度に、観客中に作者イプセンの姿が幾度もみられた。獅々のやうな顔をして、目鏡をかけてゐる。「作者だ。」「作者だ。」と、見物がはやしたてる。イプセンは立ち上つてその好意を謝した。偖、こゝに奇怪千萬なことに、



ミルオオキイで「ロスメルスホルム」を上演した時にも、イプセンはその上演に臨んだ。見物一同は作者に敬意を表した。イプセンは應揚にその敬意にこたへた。――が一方ノルウエでは八年も前にヘンリック・イプセンといふ「人形の家」の作者は死んでゐた。しかしアメリカでは彼は健康で得意満面であつた。云ひ忘れたからこゝで書き足しておくが、「ロスメルスホルム」の上演に際して、作者が親しく見物するといふので當夜の切符はたちまち賣り切れ、買ひ損つた連中は割増がいくら附いてもいゝからと、買つて歩いたので切符の値段が素晴らしく暴騰した。

秋の夜

生田花世

秋の夜はなごやかに
隣の人々の話聲。

母も語り、娘もかたり
父親も語り男の子は叫ぶ。

灯は庭に咲いて
黄いろい夜の花壇。

さやかに、にぎやかに
秋の夜の隣家の生命明し。

私達は幸福でないまでも
快い沈默が味へてをります。

灯は庭に咲いて
黄ろい秋の夜の花。

農民の若い娘が歌ふ

渡井君子

土に叫ぶ

果てしない空虚な思ひが
若い百姓娘の生命を貪る……
虐げられた、やけ土は吐息をもらす。
ひねもす働き續け、尙限りなき勞働は
潮の如くわめきつゞく……
あゝ、私の肉體は過勞から過勞へと
次第々々にすり減されて行く。
疲れ果てた肩に鍬をかついで
毎夜私は貧しい家に何を求めに歸るのか？
あゝ、若い百姓娘の私は
どこまで安息所を探し喘ぐのか？

人々よ、きいてくれ！
あのやけほてる土の中から
あの煮えかへる田圃の中から

悲しくもうごめき聞ゆる
あのやる瀬ない苦悶の歌を！
あゝ、そのやる瀬ない苦悶の歌は
一體、誰が歌はせてゐるのだらう……？

私も染めやう！

落陽は今、えん／＼と燃えてゐる
だが私の血潮は過勞に押ひしがれて沈んでゐる
見よ！
落陽さへ空を、雲を、地を
眞ッ赤に、眞ッ赤に染めてゐるではないか！
私も染めよう！　この虐げられた血潮で
地に、雲に、空に
おお、この白紙にも
ペンとインクで破れ果てるまで！

雨　よ

シト／＼と降る雨よ
私の限りない淋しさに
すゝりなくにも似たその音。
いくら降つたとて
雨よ、私達は野良に行く……
ポツ……ポツ……ポツ……
雨よ、もつと遠慮なし降つてくれ！
この破れかゝつた私達のすげ笠を
メチヤ／＼にする程降つてくれ！
そしたらお父さんは
キツト新らしい笠を買つてくれるのよ
私達虐げられた百姓娘は
いま古い笠を、簑を、野着を
悉くかなぐり捨てゝ
新らしくこの地上に甦りたい熱情で一つぱいなの
雨よ
もつと、もつと激烈に降つてくれ！

（一九二八・七・一八晩）



土堤に登りて

山田玉枝

綠色の塀にまつはる陽影が、かげらふの如くに揺れてゐる。くろずんだ綠の葉の間を縫ふあるかなきかのそよ風も時折さはやかな音を立てゝ吹いて來る。七月の末、羽織を重ねたい程だつた雨天候も夏風に逐はるゝ如くに立ち去ると、もう空も地もあらゆる潤澤性のものを、からつからに乾あげてしまふやうな、太陽の灼熱度は焼き硝子のやうに、かよはい生物にも迫つて來る。

私は昨日、音響に音響がもつれて神經をへな〳〵にしてしまはれさうな街路の騷音を逃れて、市ヶ谷の土堤に馳けあがつて見た。兩街路を大きく區切た土堤の下は淺いが、幅廣い濠である。水は淀んでちつとも澄んで居らず、塵埃の流れ寄つたのがぷよ〳〵浮いてゐる。濠岸から土堤の高邊迄は、ゆるやかな草原になつてゐるので、ボールを弄ぶ子供等や、テニスの練習をしてゐる人達もゐた。樹蔭に午睡をむさぼつてゐる勞働者、自轉車を投げ出して腹ん這ひになつて乾菓子の袋を開けてゐる小僧も居た。私は淋しく立つた痩せこけた街路樹の間から士官學校のいかめしい校舍が眺められる處に佇ずんで見た。招くが如くに大きく涼蔭をつくつてゐる。伸びるがまゝに枝を張つて來た此の土堤の澤山の松樹は、ザラ〳〵に埃を着てゐる。葉綠素の鮮かさもない。やがては區劃擴張の犧牲として切り拂はれてしまふのぢやないかと餘計な哀れみを持つて見たりもした。

陽が廻つて來てとても居たゝまれなくなつたので、私は土堤の盡きてる處まで歩かふと立ち上がつた。歩いて行く程に泌むやうに故里の山野に對する思慕が湧いて來る。市ヶ谷驛が目の前に見られる

程に歩いて來たらその邊には野趣に富んだ夏草がかきわけられる程に長く伸びてゐた。そして雪のやうに淡く楚々として咲き亂れてゐる野菊を見つけた時、私は親しき者に巡り逢つたやうな喜びに兩手を振つた。

こんなのがまあ、しほらしく。

山里に咲けるが如く白々と咲いてゐる目を廻すとそつちにも此方にもなよ〱と、ほつそりした姿が群れてゐるではないか。私は色づいて居さうな重く感ぜられる空氣を拂ふやうにして、微笑に唇を開き乍ら鼻を近づけた。

少し手折つて歸らふ。

今迄は踏み過ても氣にならない野花だつだのに、それが今私の心に閃いたものは守つて持つてかへることが、かへつて自らなるものに對する厚意であるかのやうに思はれた。私は手折た白菊の莖をヘンカチでゆはへながら土堤の彼方を眺めやつた。眼を再たび綠蔭に集る人々のほつとした姿に轉じた。

都會の人達は絶えず或るものを求めてゐる。むつとする重壓氣の下に病的な呼吸を續けてゐる肺臟はたしかに洗ひ淨めなければ危い程に異つた瓦斯を吸つてゐる。物質文明は既に「靜」を完全に破壊してゐる。夜もなく、晝もなく。動、動、又動の捲きあぐる不規律な汚塵は、自然の眞の姿に對する憧憬のせめての慰めにとの一坪の庭園迄も奪ふとしてゐるではないか。高低復雜な空への浸略、こつてりした近代風景の中に既に相容れない床しさを持つ瓦屋根は、凝固した空の彼方遙かの遙かの蒼空に強烈な思慕を向けてゐる。

午後二時、空は爆發の前のやうに不安に燒けてゐる。

快よい休息を終へた人々は、かろ〱と立ち上つて降りて行く。入り代りまたかけあがつて來る。（七月二十五日）

農民の子

成田美子

小學校に、來てる農民たちの子の多くは都の子よりよほど知的に劣つてゐる。私は劣等兒の多いのに全く驚いた。そして考へた。

農民たちは、無知になるのは、あたりまへだ。知的に心を働かす餘裕がないの

だ。そして代々貧しければ、貧しいほど、
貧乏ひまなしだ。

その子供たちが、どうして知的にすぐれた子となられやう。無知なものゝ子が又無知に、何代もかうなつて行くのではないか。農家の尋常二年の子すら朝、草刈をさせられてから登校する。

目の、クチヤ〳〵するもの、足を虫にさゝれて水ぶくれのもの、火傷の手の跡指を切つたあと、それ等をみると、私はぞつとした。いかに農民たちが、勞働のためにのみあけくれ忙しいかゞみられる全く暗くなるまで、外で、素足で、どの子も道であそんでゐるのをみる。親たちは、日がすつかり沒してからでなければハラから歸へらない。

その間の、子供の危險などを思はないでおけない。それでも尙ほ、生活に不自由だから、學用品などを、とゝのへてるものは少なく、とゝのへてゐるとしてもそれを、兄や姉や弟妹といふやうに共同の使用となつてゐるので、これをみても都の子どもなどとはよほど程度の異つてゐることを思つた。

食物にしてもいちぢるしいものだ。誰一人だつて麥飯を、食はないものは一人だつてありはしない。學校の先生だつても一人でも白飯のものはないが。

農民は、自分でとりいれるお米のその白いお米の飯も食へないのだ。

營養不良からも、あの目、あの腫物などがなほり切れずにゐるんだらうと私はみてゐる。

農村のものは不自由に堪えてこんなにしてゐるんだよ。

學校にくるのに子供に手拭さへもたせられないのだよ。

この事、ほんとうだ。

農村を見る。

農村の人々は、何時になつたら、ワカメのやうな着物を、ぬぎすてられるのかしら、そして何時になつたら小さつぱりした着物が、着られるのかしら、彼等たちは、勞働どころではなく激勞といふもので、農産の副産物として蠶をおくが、蠶が上れば、それを賣つて肥料を買ふ金にするので、ほとんど、金錢なく、激勞に激勞してゐても、ワカメの如き、着物はぬぎすてられずにゐる。

銀行は、農夫のために、田畑の收益を見積つては金は借してくれぬ。農民は、つまり銀行へ金を、預けるばかりで、何等、銀行から金融の便は與へられないのである。

銀行は、バラツクでも、これから、何々の工場が設けられるといふと、そのバラツクをみて、金融の便を與へる。しか

し、農民に對して畠や田を、見て金を借す銀行はない。

農家の、少しでも素養ある青年たちは土まみれになり、きたないものばかりを朝から晩まで原始そのまゝの有樣で用ひ働いてゐる、文明のものも、金融機關のないために昔そのまゝの勞働であらねばならず。收益は少なく、支出のみ多く、全くいつになつたなら、農民が息をつくことが出來るのかしらと慨歎してゐる。だから、青年たちは、收益と支出の差引を考へては、勞農の馬鹿々々しさを思つて都へ都へと、他の職業にありつこうとする。都會は、益々就職難が加はり、農家は人手が每年少なくなつて農作物は荒れ次第なのである。農作物にとつてこれほど正直なものなく、人手のないことは直ちに作物の貧弱と、ハイタイとが加はつていくことは目にみえるのである。

青年たちの知的な目醒を妨止して、ラチオとか新聞とか、交通機關だとかゝみんな青年にみせぬやうに聞かせぬやうにするやうな、消極的方法をとることはいけない。積極的に青年等は、如何すれば！早く目醒させなければ、農家は益々亡ぶる有樣である。

産業組合によつて現今は救ふより他にとるべき道はないのではあるが、何んとかこれ以上の、政治的問題にふれしめて全き農民の安らかな位置にたゝしめたいものである。

これを、このまゝ、この現狀の農民の有樣をつゞけていくことは、ほんとうにおそろしい何ものかゞ國內に、いまに起らずにおけぬ氣がする。農民の目醒は第一であるが、多くは無知な彼等たちの、眞當の現狀を知つて、政治家は、大に考慮の急であらねばならぬことを思ふべきだ。

農村女性の實狀

長南星子

農村女性は無自覺だ、無能だとよく云はれるのであるが、其れは農村女性の實際の生活を、知らない者の云ふことである。

男子よりも早く朝起て野良着へ着換へ朝露を踏んで仕事場に出掛ける。男子は先づ一服と煙管を出してポカ〳〵やる、其れから出掛けるのであるのに、又彼女

らは朝夕の食事の用意もせねばならぬし食事中は自分が喰へる暇もない位給仕をする。其の上飯が軟いの堅いの汁が辛いのあまいのと、三度々々に小言を云はれる。食後の後仕末もせねば成らぬ。學校へ行く子供の世話から嬰兒の世話まで一切合切の忙しいこと！　垢衣の洗濯や破れた着物の繼ぎはぎや、晴着を裁縫するのは雨の日か、休日に於ける女の仕事と相場が定つてゐるのだから、休日だつて休む事が出來ない、殊に養蠶時の多忙さと云つたら傍で見る目も痛ましい位である。寢る目も閉ぢず、食事もロク／＼喰べないでスタバタ／＼と立働かねばならぬ。そういふ場合でも食事の用意から子供の世話は自分でしなければならぬ。

養蠶がすむと、男子と同樣野山に出でゝ働くのだ、炎天鐵をもとかす眞夏の太陽にジリ／＼照らされ乍ら、膝を沒する泥田の中に粉々たる肥料の匂ひをかぎつゝ田の草取り！　拭つても、拭つても、拭い切れない汗をポタ／＼と落し乍ら土も燃え立つかと思はれる太陽の光線を菅笠に受けて畠の草取り、ブン／＼襲ひ來る虻蚊にところ嫌はずチク／＼やられる其の他野燒き！草刈！稻刈！取入！製炭の手傳！薪伐り！何んでも男子のする事に手を付けない仕事とては無い位だ。仕事の能率は如何と云ふに、決して男子に劣つてはゐない。

農村にての唯一の慰安休息日であるべき盆正月ですらも、ろく／＼休んで居られない。地方特有の交際もせねばならぬ人並の手料理もこしらへねばならぬ、女子供、老人の頭から着物に至る迄萬事が彼女達の手だ。男子は其れらに就ては全く無關心である。

家庭の經濟、育兒、食事、衣裳の整理内外の掃除、交際、是れ等はすべて農村では女性の專賣であるかの如き觀を呈してゐる。野良に出てゝは男子に劣らぬ働き振りをしてなほかつ、右の如き餘分の仕事をせねばならない。休日は休日で日常の仕事に忙殺され取殘されて有る種々の小仕事をするのだから休むひまとてはないでないか。かうして年が年中、寸暇も見出せないほどに仕事に追ひ追はされ乍ら尊い人生の幕を閉ぢやうとする農村女性に對して、無自覺だ、とは何んたる寢言ぞ！　何處に自覺する餘地があると思ふ。

又年頃になれば他家に緣付いて人知れぬ大苦勞をせねば成らぬ。農村ではお嫁さんになると食物から待遇に至る迄差別扱ひをされ、一家の者でありながら部屋によつては自由に出入する事さへ許されず朝は家人より早く起き、夜は遲くまで

働き、三度の食事も、ろく／＼喰べらせないで一片の副食物も與へられないのだ、それに第一、姑の氣嫌をとらねばならぬ家庭の事は流元の隅から便所の隅に至るまで何かと心付いて立廻らないと姑や亭主や親類の者の氣に喰はず直に追ひ出されて了ふ。斯くして權利は蹂躪され、自由は剝奪され、自覺は抑壓され、實に言語に絕する虐待振りに、忍ぶに忍びざる精神的肉體的一大苦痛を與へられ乍らも尙且つ沈默して亭主に忠勤、家內の者の氣嫌をとる事に心を注がねばならぬ。

恐らくは彼女達は全生涯を通じて、お嫁時代程陰慘な生活を餘儀なくされる時は無いんだらう。我が農村女性は何故に昭和の文明社會に生を享けたのだ？ 時代は流れ、封建的德川時代から昭和の御代となつた新時代に、彼女達の生活は餘りにも悲慘を極めてゐる、傳統的因襲にとらはれ、過重なる負擔に石の如き沈默！ 茫々たる砂漠の如き無味乾燥な生活を餘儀なくされてゐるのだ！

見よ！ 都會に於ける女性を！ 單んに生れた土地がちがつたと云ふ偶然の運命に依つて、斯くも甚だしき懸隔を生ずるものかと、驚くばかりの都會婦人生活を！ 彼女達も工場か商店に、或は何かの內職をやつて働いてゐるとしても、朝七時から晩の五時迄と云ふ樣に一定の時間で働く！ それに都會婦人は月に二回乃至四回の公休日があり、更に春秋二回の運動會、遠足など種々精神を慰安する催しが行はれてゐる。そして、仕事場から歸宅すれば農村女性達の想像だも及ばぬやうな立派な浴場に行つて汗と塵を流し一日の疲勞を癒す。それから食事に取掛る若し手料理が面倒なれば何も態々自分が拵へる必要はない。ハイ！モシ／＼電話一つでチヤンと御飯は運ばれる、親子打揃つて食卓を圍む、毎日の惣菜料理だつて、農村では盆正月ですら喰べる事の出來ないやうな珍味のものばかりだ、食後は今日の新聞、雜誌に目を通す。一寸夜店を素見に出掛ける、寄席に行く、活動に行く、そら銀座だ、淺草だ、歸りには、しる粉屋に入る、氷屋に入る、うどん屋に入る、斯うして目を樂しませ、口を喜ばせ一日の疲勞も全く忘れる事が出來る。

此の悲慘な生活に堪へ兼ねて女工にでも、甚だしきは娼妓にでもと志願して、農村の苦痛から脫脚せんとする者が年を追ふて增加する傾向を示しつゝあるは一體何を雄辯に物語つてゐると思ふ？ 道學者は惡罵して「近頃の農村の女は浮薄なり」といふのであるが、道學者が何んで吾が農村女性の實生活を知らう。

彼女達どん〳〵都會に走るから農村は衰頽し、農村問題の惹起！ 都會に在りては、女工、娼妓の虐待事件、女工の勞働爭議等を勃發せしめ社會問題となる、母性としては不適當の身體となり、出來た子供は不完全である。斯樣に重大問題であるが遺憾ながら農村には彼女の逃走を引止めるべき何等の魅力もないのだ。

× × ×

文明人として昭和の今日に生をうけたのに！ 農村の女性にも人なみな、明るい人生を與へよ、と私は叫びたい。みぢめすぎる！ 樂しみもない。希望もない張り合ひもない、何の變てつもない死の如く靜かに暗い、農村の女の奴隷的な生活！

農村の女は、今に、營養不良と、休みなく働きすぎることゝ、考へもなく子供を產みすぎることとから、自分で自分を滅ぼしてしまふだろう。いや、自分の產んだ子供をも！ これから次代の子供を生まねばならぬ娘のからだをまでも、ほろぼして農村全滅に立ち至るまで目がさめないのであらうか。

● ●

「また遲刻だ、君は一體、目醒の時計が聞えないのかい」
「いゝえ、先生、僕が起きる時には、もう目醒しが鳴つてないんです」

● ●

きいちやん曰く「あたしネ、生れた時、とてもびつくりしちやつたワヨ。だつて、一年も一年半も、チツトモロが利けなかつたんですもの。」

● ●

夫「おい、俺達が一緒になる前に、お前に結婚を申込んだ阿呆はなかつたかい」
妻「ございました」
夫「何故、其奴と結婚しなかつたんだ」
妻「其奴と結婚したのです」

● ●

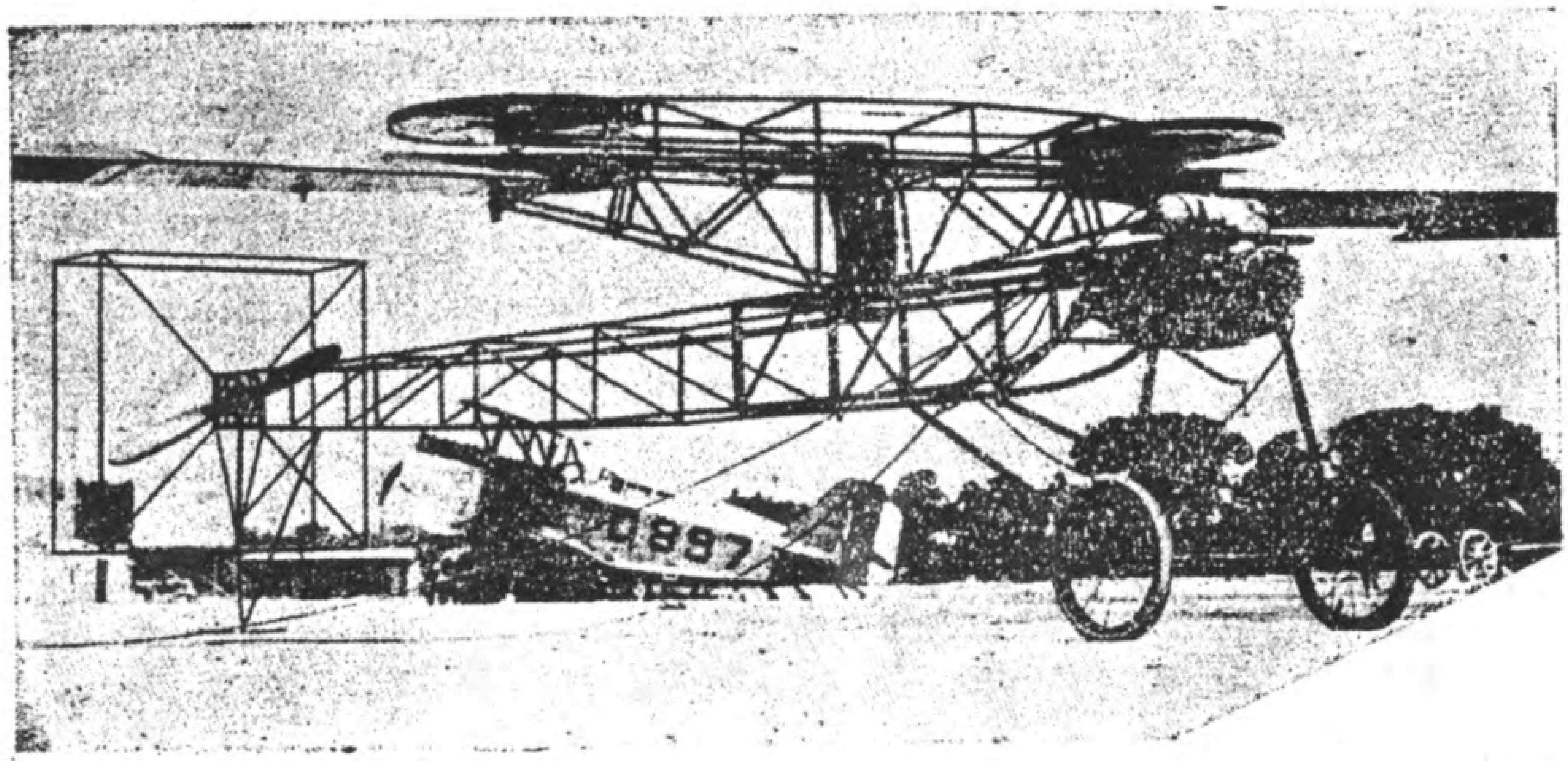
一太郎「お父さんと僕とで、世界の事は何でも知つてるよ」
二太郎「ぢや君、ジュネーヴは何處にある」
一太郎「ウ、ジュネーヴか、そいつあお父さんの部さ」

● ●

借家人「この家には幽靈が出るつて、本當ですか」
家主「いや、旦那、充分に消毒させましたから、その御心配は無用です」

● ●

主人「お前さんのいゝ人が外で待つてるよ」
下女「オア、旦那樣はどうしてあれが私のいゝ人だつてお分りになりまして？」
主人「わしの葉卷を吸つてるぢやないか」



飛行機の發明とその脅威

岡田敏子

人間は隨分古くから鳥のやうに空を飛んで見たいと云ふ慾望を持つてゐたと見えて、何處の國の神話にも、傳説にも大抵さうした話が、語り傳へられてゐます。西洋の天使とか東洋の天狗の話などはその代表的なものですが、我國では高天原時代の神代の事は別としても、有名な馬琴の「弓張月」にも爲朝だつたかその家來だつたか、大島から伊豆へ小供を大凧に繋りつけて飛ばす話しが出てゐます。其他、石川五右衞門が名古屋城の金の鯱を盗むために、大きな凧を造つたとかさうした話が未だ他にも傳へられてゐます。よしその話は作話にしても、大きな凧を作つて巧くそれを用ひれば人間も空を飛ぶ事が出來る可能性があると云ふ點で、天使や天狗の話に比べては遙かに實際的な話だと云へるでせう。

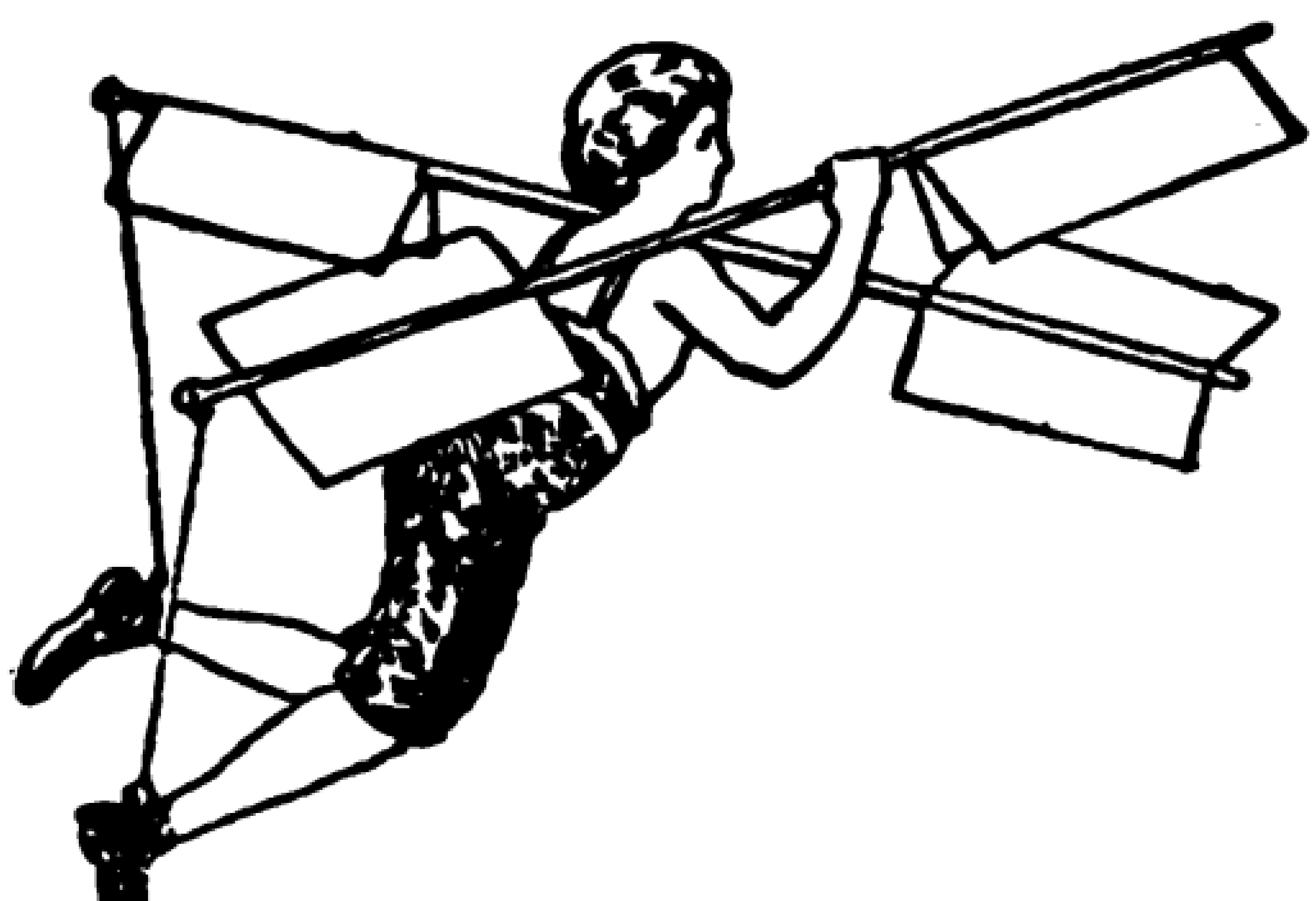
さうした物語作者の記述は兎に角、人間の手で人造の翼を作つて空中を飛んだと云ふ記録は千六百七十九年フランスの

ブルスニエーと云ふ人が、自分の手と足とで、翼を動かせて二階から小屋の屋根に飛んだと云ふ事がありますが、恐らくこれが、比較的正確な記録として傳へられてゐる最初だらうと思ひます。

日本では今から二百年程前に、琉球人の安里某と云ふ人が弓を水平に眞すぐの柱へ取りつけて、その柱の上に鳥の翼のやうなものをつけて、弓の弦を足に結へて、その弾力で飛ぶ飛行機を發明して、崖の上から空に向つて飛び上つて飛行したと云ふ事です。又菅茶山の「筆のすさび」には、寛正の頃岡山の表具師の幸吉と云ふ者が鳩に型取つて、自分の身の重さに合つた翼を作つて空中を飛行したが當時の役人から、人のせぬ事をするてふ咎めを受けて、追放されたと云ふ事が出てゐます

十八世紀の初め頃、フランスのルブリイと云ふ水夫が信天翁が翼をはゞたかずに、水面の上を飛んでゐるのを見て滑翔式の飛行機を發明したとの事です。

以上に述べた飛行機と云ふものの、いづれも自然の飛行を模ねた簡單なものでありますが、それを物理的に研究して、現在の航空力學を創始したのは、ドイツのオットー・リリエンタールと云ふ人であります。この人は千八百九十六年に自分の發明した飛行機に乘つて、ベルリンの郊外で實驗中、墜落して死にました。丁度それと同じ年にアメリカのラングレイ教授は、小さな蒸汽機關で動く飛行機を發明して、ワシントンの近くのポトマック河を越えて、四分の三哩を三回飛びました。飛行機でそんなに長距離を飛んだのは、これが始めであります。



ブルスニエーの發明した飛行機

飛行機にがす爆發機關が用ひられるやうになつたのは二十世紀になつてからで、前のラングレイに續いて、カーチス、ライトなど云ふ發明家が現れて、いろ／＼研究の結果、遂に千九百三年に大體今日のやうな飛行機が完成されたのであります。

飛行機と同じやうなものに輕氣球、飛行船がありますが、輕氣球は千七百八十二年にフランスのモンゴリフイエ兄弟の發明したもので、佛獨戰爭にパリがドイツ軍に包圍された時

に之を用ひて、敵の背後にゐる味方に通信したのが、その實用の始めであります。

輕氣球は始めは紙製の氣嚢に藁を燃して温めた空氣を入れたものであつたが、其後水素瓦斯を利用するやうになり、それが發達して現在の飛行船になつたのです。

輕氣球は、例の大きなガスの袋を背負つてゐて、風に流されて、餘り飛行に適さなかつたものですから、始め、主として展望用にされてゐましたが、其後種々改造されて、世界大戰爭には例の有名なドイツのツエックペリン式飛行船が現はれて、聯合諸國を驚せたが、その後フランスで、デイクスミコート型硬式大飛行船が、六日間無着陸繼續飛行に成功して世界の人心を動揺させました。

無論、飛行機にも、飛行船にも現在では非常に澤山の種類がありますが、それは專門的になりますので、此所では述べませんが、飛行機にしろ、飛行船にしろ、現在はもう單なる實驗の時代を過ぎて、いろんな實用に供されやうとしてゐます。アメリカやヨーロッパの主要都市では定期航空路が開かれて、盛んに旅客用として用ひられてゐるのは一般によく知られてゐますが、最近にはアメリカで難破船の人命を救う爲めに飛行機によつて、救助索を運ぶ新方法が工夫されたさうです。其他飛行機や飛行船が南北探險に用ひられたり、郵便の運送に用ひられたりして、文明の利器として益々効果を發揮して行く事は誠に悦ばしい事でありますが、只此所に恐るべき事は最近世界各國、軍事上の備へとして、殆んど競走的にその改良と、充實を計つてゐるのは誠に歎かはしい事で、專門家の云ふ處に依れば、現在の情態で若し大國と大國の間に空中戰が行はれた場合には、どんな大都會でも忽ち廢墟のやうになつてしまうさうで、その防備はとうてい不可能であるとの事である。これではいくら地上だけの軍備縮少を騒いでも仕方のない話で、折角澤山の人々が、無數の犧牲を拂つて發明改良された文明の利器も、そんな事になつては却つて人類に惡魔よりも恐しい禍を齎すやうな結果になるかも知れぬと云ふ事は私達が深く考へなければならぬ問題であります。

弱い職業婦人の立場から

開地敏子

『一致は力なり』と誰かが云つた。

私達純無産階級に屬するものは、お互ひに手をつなぎ合つて生活を擁護するために共同戰線を張らなければ、到底資本家――支配階級――に對抗出來るものではないと云ふことが、筋肉勞働階級には遲マキ乍ら氣がついて來たから、此階級だけは資本家の不當に對して直ぐ結束するだけの訓練が出來て來た樣に思はれるが、筋肉勞働階級よりものわかりのよかるべき筈の所謂精神勞働階級には、いまださうした目醒めがないのみか、甚だエゴイズムが多い樣である、まして嫉視反目の多い職業婦人階級に於てをや。

×

私は長らく精神勞働的な職業婦人として自活の道を辿つて來た。從つて今日迄に可成精神勞働階級、職業婦人階級のエゴイズムに苦しめられて來たのである。

彼等は自己の地位を擁護し向上せしむる爲には、いつも同僚をおとし穴に突き落して少しも悔ひなかつた。現實の世相は斯くも同僚を失職の泥沼に投げ込まなければ自己の地位を確保することが困難なのであらうか、私は決してそんな無法なことは思はないから、私達の同僚に對していつも云ふのである。

『私達はお互に純無産階級、實にその日暮しの人間ぢやありませんか、私達が同僚のアラを探して資本家に告げ口するなんてことは愚の骨頂です、弱い立場にある私達はお互に協力して、一致團結の力でもつて資本家に對抗するのでなくては、到底私達無産階級の生活は樂しくはならないし、樂しく仕事してゆくことも出來ませむ、だからお互の失策

はお互にかくし合つて、誰もが傷つかない樣、失職しない樣、ほんとうに親子の樣な氣持で仕事をしてゆかうぢやありませんか」と。

併し其言葉が共鳴せらるゝ時は、同僚が共同の叱責、共同の損失、共同の侵害を受けたときに限るので、そんな場合こそ『社長の奴、馬鹿にしてやがる』と自己擁護に大氣焰をあげるが、誰か其中の一人が特別の叱責を受けた樣な場合になると、他の同僚達は「いゝ氣味だ、俺一人がお山の大將になつてやろう」と云ふ氣で共同僚を擁護したり、同情したりは決してしないで腹の中で赤い舌をべろりと出す無產階級のエゴイズムを、私は生きんが爲に働きつゝある間に幾度も見せつけられた。

彼等は同じ無產階級にあり乍ら、同僚を地獄の底に突き落して快哉を叫び、因果はめぐる小車と云ふことを知らぬから徒らに資本家の走狗となつて一生を終る淺ましさ。無產階級が斯うしたエゴの夢から醒めないでゐる間は、いつまで待つたつて私達の理想の社會は產れて來はしないと云ふことを私はつくゞ感じる。

×

最近私の身邊に血で血を洗ふ醜い爭鬪が起つた。

こんなことを發表することは恥しい事かも知れない。併し恥しい話を敢てするのは常に弱い地位に置かれてゐる我邦の職業婦人に、何等かのヒントを與へやしまいかと云ふ老婆心からである、恥は、恥のまゝにさらけ出して讀者に訴へるのでなければ眞實は摑めない、だから私はありのまゝに事實の眞相を書いて見る。

私が某新聞社に勤務したのが二年前で目下月俸七十圓と電車賃を貰つてゐる。ところが私が入社以來今日まで、首腦部の或一人の男が頻りにモーションをかけて來た。モーション必ずしも惡いとは云はぬ。燃え易い男と女、木石でない限り好きであつたり、嫌ひであつたりする感情の違ひは如何ともすることは出來まい。併し立場は考へなくてはならぬ、不義がお家の法度であると云ふことは男女が相愛することが惡いのではなくて、風紀を亂すことが惡いのである、だから什うしても相手の女が手に入れたくば、手に入れてよい樣な立場無理のない立場に置いて共鳴すれば文句はない筈であるけれども、嫌ひなものを好きになれと强制されたつて好きにはなれぬ。共鳴しろたつて共鳴は出來ぬ、それを共鳴せぬから癪

だ、社をおつぽり出してやれ、と云ふのは最も卑怯な方法で男らしくない行爲である。

だが其卑怯が世間には甚だ多い、男同士でも、自己の榮達の爲には常に卑怯な行爲が絕えないが、女となると、長い因襲が女を玩弄視してゐるだけに、過渡期にある職業婦人階級は常に男の卑怯に弱らされてゐる。

此點を何とかせなければならぬと云ふので私達數人が發起人となつて、職業婦人協會を組織した。職業婦人の團結力で卑怯な野獸の樣な男達をはぢき飛ばして、職業婦人として眞面目な地位を確保しなければならぬのである。これは餘談だが、扨て私に頻りにモーションをかけて失敗した男は心中甚だ穩やかでない。いつかは思ひの通らぬ腹いせに…と其復讐の爲であらう、こと〴〵に私の仕事にケチをつけるばかりか、三人愛人があるの、四人愛人があるの、と口から出放題を並べて私を中傷することに腐心してゐた。

年は取つてもお多福面でも、男ばかりの中では正に紅一點の弱味と强味が私にある。

我邦は神代の昔から女なくては夜の明けぬ國、興味の中心點はいつも私と云ふ一人の女性を取り卷いて戯談も云へば、猥談も云ふ、私も二十や二十一の小娘ではない、憂世の苦勞を舐めつくした二人も子供のあるマヽさん、未亡人であるから、戯談や猥談を云ふ男達に、宗教家や學校教師の樣な態度できめつける樣な馬鹿々々しい氣持になれもしないし、小娘の樣に耳を覆ふて逃げ出す初心を、裝ひも出來ぬ私の正直さは、職業婦人の悲しさに、戯談を買つて出もすれば、猥談を買つて出もする。併し其戯談や猥談を實行に移したことは一度もなかつた。博愛衆に及ぼすと惡口せられるかも知れないが誰に對しても不愛想に出來ぬのが弱い職業婦人の現在の立場であり、その仕方なしの愛嬌を自惚れて氣がある樣に錯覺するのがむかしから男の通有性である。彼等達は勝手に自惚れて「組し易い女」とチャンスを睨てゐる樣に見えた。

ところが或日のこと、氣狂ひの樣な男が私を訪問して來たあまり度々面會を强要されるうるさゝから私は其男に面會するを避けて外出した、ところがそれに憤慨した其男が、非常に高聲に私の惡口を云ひ放つて歸つたのが導火線となつて、私が翌日出社して見ると、社長が一寸來いと云ふ話である。そこで私は社長の前に出ると、社長宛に編輯員一同から決議文が出てゐた。曰く

「開地敏子は毎日早朝出社し、比較的高給を食むに不拘仕事には一指を觸れず、神聖なる新聞紙を自己宣傳の用に供しあまつさへ社の監督の地位にある者と通諜し」云々とある、それだけならよいが、最も侮辱した言葉、私に賣淫的行爲がありと云ふ甚だ迷惑千萬な聽き捨てならぬ文句を見ては、私の疳癪玉が素晴らしい勢ひで爆發した。

月給が高過ぎるの、仕事をせぬの、新聞紙を自己宣傳の用に供するなんてヒステリー的な抗議は聞き流せもするが、こと貞操に關する問題となると、什うしても聽き捨てには出來ぬ。だから私は社長の前で編輯員一同に其辯明を求めた。

「貴方達、此決議文中の賣淫的行爲云々とは私の何を指して仰有る言葉です？」と此の質問に對して答へ得る者は一人もなかつた、みな下を向いて赤面してゐる中で、辯護士のNと云ふ男は、私に突つかゝる樣に口を切つた。

「その賣淫的行爲と云ふのは貴方が石原と云ふ男と、あの女は素敵ですネ、いくら位あつたら自由になるか」と話してゐた、そのことが所謂賣淫的行爲で我々はそれを媒合容止と認めたからと云ふのである。

それには私が驚いた、現に此決議文に署名した社員の中でそんな程度の猥談をせぬ男が一人でもあつたであろうか、私に戲談や猥談を賣らなかつた男が一人でもあつたであろうか新聞社の編輯室なんてものは、年百年中戲談と猥談の渦卷である。それがいやなら新聞社には一日だつて勤務することは出來ないし、同じく机を並べてゐる以上、相手にならなければキザな奴、生意氣な奴と惡口雜言せられることはまぬがれはしない。馬鹿らしいと知りつゝも、人格を低下せしめらるゝと知りつゝも合の手になつて應答しなければならぬのが、悲しいかな職業婦人の立場である。現代の世相では。

何故彼等はこんな決議文を書いて私を中傷し、讒誣したか其底はみな戀の叶はぬ腹いせ、嫉妬であつた。

一人の男が笛を吹けば、數人の踊り子は笛の音のまゝに踊つたのである。

怠け者の彼等は規則通りの時間に出勤する私を憎んだ、署名を許されぬ記者は、署名してかく私の記事を自己宣傳だと罵つた、それが蒼蠅いから執筆を中止して消極的な仕事をすると、仕事に一指も染めぬと惡口した、女が男より給料の高いのが癪だと、アラ探しに浮身をやつした。

これが無產階級同士の日常生活である。「馬鹿野郎、何てお尻の穴が小さいンだ」と、啖呵を切つて社を辭職せば實に痛快なのだが、痛快のアトには生活難が大きな口を開けて私達の行手を暗示してゐる。

からくり二つ

青山よしを

七月の末頃から高まりはじめた米價は、八月から九月へかけて此の一ケ月餘りの間に、暴騰に〳〵を重ねて七月の終りに一石二十七圓四五十錢であつた玄米が、九月七日の現在では一躍三十九圓と云ふ暴騰振りで僅か一ケ月の間に、石當り十圓五、六十錢の高値を稱へる樣になつた。

新聞の報ずる所に依ると、是れは背後に政友會の有力な二三代議士が策動して三十萬石程もの米を買占めたとのことである。

去る梅雨以後の天候が甚だ惡かつたゝめに、かなりの減收を見込んで居た事も原因の一つであらうが、事の如何は兎に角として私共眞實の消費者として、斯した一部政治屋や相場師どものからくりで左右されるわれ〳〵の日常生活を、致方がないと諦めるより外ないでしよか？

それも農村に於て私達と同じ樣な立場にある小作人のために、米の刈入れと共に支拂はねばならぬ肥料代や、呉服代や鹽物代や、又これから先き向ふ一ケ年間の諸費用にあてるために賣られる五俵六俵の米の値段を少しでもよくしてやるやうにとの擴大な爲政者のお慈悲とでもあるならまだしもだが昨年末小作人から全收穫の大半を年貢米として取上げ、一錢でも高く賣らふと日毎夜毎に相場の成行を鵜の目鷹の目で睨んで居る地主どもが一向に米價が上がらない所から、一日々々と賣惜みして居る中に早や新米が取れる頃になつて、愈々さすがの强慾な地主も泣面で澁々賣らねばならん處をすかさず付け込んだのが、其處が商賣の政治屋だ、昨年末から今年の春へかけて米價の下落を防止しようと二百五十萬石も政府で買上げをしたが、依然として下り氣分を辿つて來たので是れでは從來揭げて來た政友會の一枚看板（放漫政策）の面目上にも是が非でも此所で米價を釣り上げて、次の選擧に御機嫌

を害ねない様に、成る程政友會なればこそ、と云つてもらいたさから、地主階級の御機嫌を取るために手持米の整理期を見計つての買占であると知つては、如何に永い間欺瞞と搾取にならされた私達であるかも知れないが、此上御無理御尤もと承服してもよいでしよか。

遂に一月を前後して十五キロ瓦の白米が八、九十錢方も値上され此間東京白米同業商組合等では、組合員なる白米小賣屋に小賣値段表を五回も變更（値上亦値上）して配付して居る。それに依ると、一等米と稱する米價は既に五圓十錢になつて居る。處で一袋（十五キロ入）五圓にも賣れと云ふ一等米とはどんな米かと某米屋に就いて調べて見ると、今此店では一等米四圓七十錢である。越後米の三等一俵、本石米の四等二俵、千葉米の四等一俵都合四俵を混合して搗上げ、それを一等米として賣つて居る。

其れでは是等の玄米をどれ程で買つて居るかを見ると、九月六日現在の正米相場では、越後の三等で一俵十四圓、千葉の四等一俵で十四圓二十錢、本石の四等で一俵十五圓十錢であるから、驛なり倉庫なりから是れを米屋迄引取る引取賃等も加算して見ても、混合した一石の原價は大凡三十六圓五十二、三錢位である。是れを搗上げると約七分程搗減りするから、その搗減り額を加へても精白米一石の原價は三十九圓〇八錢となる。是れを十五瓩入一袋に見積ると四圓十七錢弱となるから、此の米屋は十五瓩に付四十三錢といふ利益を得て居るのであつて、此利益率は一割一分二厘强にあたる。

では此の米屋の配合割合はどうかと見れば別に惡い方ではなく一般的な標準のやり方であつて、時と品とに依つて混合米の品名が異るだけで程度には變らない。俗に云はれてゐることでもあるが、米屋は日に二、三俵宛の米が賣れゝば優に一家の生計が立ち、何時の間にか貸家も建て、金も貸し始めやがては町内でも顔役になると云ふ理由は、まあ此樣な譯からであらうことをお互は知らねばなりますまい。

ついでにもう一つからくりの內輪を覗いて見やう。それは醬油です。さて龜甲萬やヤマサと云へば誰でも醬油の最上品だと信じてゐるやうであるし、市中の酒屋等で賣つて居る二立入瓶詰の賣價八十錢から八十五錢、九升樽詰で五圓七、八十錢から六圓を相當の値段だと思つて居れるらしいのであるが、是等の醬油がどんな方法で取引され、そしてわれ〳〵の臺所に運ばれて來るのであらうか。

現在東京には十六、七軒の龜甲萬、上ヤマサの一手販賣(專賣店)店があつて、野田や銚子の醬油釀造所から東京へ向け送り出される荷物(龜甲萬、上ヤマサ)は必ず此の十六、七軒の問屋の手を經る事になつて居る。會社(釀造の倉元)は一般問屋商店とは如何なる場合にも直接取引が出來ない事とになつて居るから、東京の卸賣商でも小賣商でも皆此問屋を經て各自の取引をすることになる。其處で値段は、每日多少上り下りをして居るのであるが、その譯は、會社から各指定問屋に向けて每月一定數量の品を送つて來る、各問屋では取引客の多少に依つて品の賣捌きが常に一定して居ない。或る時は豫定より早く荷がなくなつたり、或る時は豫定の通り賣れなかつたりする。(なぜかと云へば誰れでも皆一錢でも安い所に行つて買はふとするから)すると問屋は時の狀勢に押されるのと今一つは次の仕入や手持品の支拂期等の關係から價額(値段)を引下げなければならなくなる。斯ふなると一軒が二軒三軒と何れも其例に倣つて値下げを始める。所が今日誰もが醬油と云へば龜甲萬かヤマサで其以外では使へない等と途方もない迷信や誘惑に痲睡させられてしまつて居るのだから、今日の野田や銚子の會社は昔日の其れではない、實に傲然と構へてゐるのである。昔は、どうぞ手前の醬油をも一つ是非お店で扱つて頂きたいものです、値の所は他店樣と決して負けない心算で勉强致して御座いますが、もう何んでしたら、何日何時でも又御相談に從ひますから、等と頻に頭を下げたものだが、此頃の會社の對度と來たら其處か、俺の方から賣つやるのだと云つた具合で、會社からは問屋へ向けて多數のスパイを派して、問屋の取引事狀やら値段の高下等を調べさせ其都度會社に報告させ、其れに依つて得る種々なる狀報を以て問屋に對する次期送荷に手加減を加へる等目下の問屋は會社の品を取引するのみだ。會社から送品の手加減をされる事なつてゐるのだから、それに依つて問屋自體の經營に影響を來す事になる、從つて結局會社の意向に左右されてしまう。一般消費者が今程馬鹿々々しく盲信をしなかつた頃には、東京の十六、七軒の問屋の意志に依つて會社を左右した事もあつたのに、會社では極力値段の低下を防止する事に努めて居るのである。

殊に此所一ケ月程前から、會社は一躍六、七十錢を値上げす可く問屋向の送荷を著しく減じ、問屋の在荷數の減少を待つて値段の釣上に狂奔して居るやり方と云つたら實にお話に

ならない悪辣さである。斯した彼等會社側の策動に依つて今一月も經て十月頃にもなると今迄五圓七、八十錢の九升樽が一躍六圓七、八十錢から七圓と云ふ恐しい高い値段で皆の臺所に屆けられるのだから、そして一寸付加へて置くことは小賣商店の儲けは二割五分から三割は缺さない所だと云ふことである。

私達消費者は一方にやがて霜が降る頃になつても朝まだ暗い五時頃から起きて身仕度をして、七時の汽笛迄にはどんなに頭痛がして氣持が惡くても、お腹が痛い樣な時でも、必ず遲れぬ樣出掛けねばならない。一回の早退でもすぐ暮の賞與に加減される會社の工場規定に盲從して、精勤に〳〵を勵んで、それでやうやく年末の昇給(其れも二年目に一回位の)が日給で五錢から十錢、時間請負給で一錢から二錢と云ふ有難さであるのである。

是れ程の思ひをして居る私達の生活を僅か二、三人の政治屋や高が幾十萬圓位の一、二株式會社の爲に、今日の生活を思ふがまゝに、しかも幾百萬人と云ふ大衆が左右される此の現實を、是れでも私達は時代に遲れない文化生活を享有して居るのだと、長火鉢に凭たれて長いキセルを叩き付け乍ら臺所口を伺ふ御用聞き商人から尊稱される奥樣然として氣取つた横柄な態度で御用聞きへの注文を依然として續けてゐてよいだろうか。

最後に、醤油の原料と眞實の値段とはどれ程かを知つて頂きませう。

最上醤油八十石の成品を得るに要する仕込材料は、大豆二十六石（六斗入叺一本三圓程）大麥二十六石（一俵四圓程）食鹽五千斤（五十斤叺二圓）是れを水と混じて五十石とする種糀五十袋(一袋二十錢)紛炭千四百斤(百斤一圓三十錢)石炭一千斤(百斤一圓六十錢)それに人員延で二十人位であるから純良の醤油一升の原價はたつた二十七、八錢と云ふ事になる是れは專賣釀造に從事して居る或る購買組合の人が關係者に報告した報告書の控から寫したものであるから信ずべき報告である。

どうでしせう、時々刻々に變つて行く商店のウインドーを覗いては、我こそは時代の潮流に遲れじとデパートの欺瞞商策にうま〳〵と乘ぜられて憂身を窶しませうか。それとも、成程是れではと隣近所を説いて力強く組合ひませうか。消費組合に。そして正しい理想の彼岸へ旅立ちませうか。確かり手に手を握つて我等の店、消費組合へ！

婦人と社會的關心

奥むめお

近頃、消費組合、及び婦人消費組合協會の用向きから、いろ／＼な生活程度の奥さんやおかみさんに會つて、ゆつくりと話し合ふ機會を非常に多くもつのであるが、特に私の考へさせられてゐる點は、一、近頃の家庭婦人の多くが、決して、單なる家庭的雜務に終日追はれて暮してゐる生活に滿足してゐないといふこと、及び二、而もそれらの人々が一家の主婦として一人の男の妻としてはまことによく立派な婦人である場合が決して尠くないといふことの二つである。

それに就いて、いつも思ふことであるが、それらの家庭婦人の關心をもう少し押し擴げ、ひき上げて行つて、婦人たちの持つ優れた才能をそれ／＼によく生かすことが出來たならば、社會はそのためにどんなに多くの利福を增すことが出來るか測り知れないといふ事である。從來婦人の力は、殆んど全部、非常に狹く排他的に個々に城廓をたてめぐらした各家庭の中に埋藏されるばかりで、それが少しも社會的に生きる道を與へられなかつた。

まことに長い間婦人たちは、たゞ婦人であるといふ事のために、家庭的にも、社會的にも一つの深いハンデキキャップがあつて、婦人の持つて生れた才能は徒らに埋められ、蔽はれ、生かして伸ばす機會を如何に無慘に奪はれつゞけて來たことか。

此所ばかりは婦人の持つ天國とさへ云はれて來た家庭――婦人としてはその才能、創造力を發揮する唯一つの許された世界――も、婦人のためには、むしろ鎖につながれた勞役所の觀がありはしなかつただらうか。

×

一軒の家の主婦として、一人の男のいゝ女房として、婦人たちが懸命にいそしみ働くその心掛を擴大して、進んでは社

會的にもいゝ母でありいゝ主婦である樣に、特に婦人としてのわれ〳〵がもつ社會的關心を培ひ育てゝゆきたいと思ふ。
　奧山に人里遠く離れて、自分たちの家族だけが佗び住居をしてゐる世ならばいざ知らず、如何に母親が身を粉に碎いてその子供の躾け方に就いて腐心した所で、今日のやうな社會環境では、子供たちは、親の知らぬ間に親たちの知らぬ所から、いろ〳〵な良い事惡い事を習ひおぼえて育つてゆく。即ち、一人の自分の子供をよく育てるためにも、子供の住む環境、即ち、社會をよく改造してゆくことが第一條件でなければならない時代である。
　衣服費、食費、住宅費その他の經費いくら〳〵と細かく目算をたて切りつめた生活の標準を作つて、それに從ひたいと希つた所で、大昔の如く、着る物も殆んど全てを自ら絲を紡いで機を織つて縫ひ、食べる物もその大部分が自分の手で作られ、捕獲されて、住居その他の一切も殆んど人手を借りることなしに自給自足の生活が營まれ得るならばとにかく、今日のやうに分業がいよ〳〵激しくなつて、一本のマッチも一滴の水も、大仕掛けな組織と澤山の人の勞力を經てやつと消費者である自分たちの手もとにまで到着するやうな事情の下では、そして水道、電氣、瓦斯、汽車等、獨占的な企業がだん〳〵多くならうとしてゐる今日、物價の騰降は政治と密接な關係をもつてゐるのであるから、さういふ社會的政治的な考察を拔きにして自分勝手に組み立てた豫算は、結局その實行が不可能で終るばかりである。

×

　アメリカで古い婦選運動者として有名な某女史が、いろいろ考案して行つて來た婦選運動の一つとして、次の如き興味深い例を話してゐる。
　ショウウインドウに一軒の家があり、中に赤兒が寢てゐるその家から、そして赤兒から、無數の針金が外界につながつてゐるのであるが、それらの針金の或ものは、瓦斯會社に達し、電氣會社に達し、文部省に達し、學校に達し、幼稚園に達し、公園に達し、公設市場に達し、衞生局に達し、稅務所に達し、病院に達し、菓子屋、魚屋、埃塵運搬夫に達してゐる。即ち、今日の赤兒一人の生活さえ、こんなに無數の目に見えぬ針金で、社會のあらゆる機關と深い交渉をもつてゐるそれらの機關の一つ〳〵が、うまく管理されてゆくと否とは一つにかゝつて我々の家庭生活の幸となり、又不幸となる。

卽ち、婦人の參政權は、社會生活のさうしたあらゆる方面に婦人の關心を求めて、われ〳〵の家庭生活乃至社會生活をよりよくしてゆかうとする一つの道だと說明してゐるのであるが、まことに適切な比喩ではないか。

一家の經濟をうまく切り盛りしてゆくために、一錢二錢を儉約して三丁五町さきの公設市場へ通ふことを苦にしない主婦や、二錢三錢を値切ることを以つて自分の經濟的才能とこゝろえてゐるやうな主婦は尠くないやうであるが、個人主義的である。社會的にもつと廣い立場から、全ての主婦がとも〳〵に安い買物が出來るやうに、協力して共同仕入をするなり、關稅、消費稅の撤廢運動を計るなり、不買同盟、不正商品の摘發、進んでは物價の上り下りに關係する政治的な禍根をすつかり取除いてしまふ迄に、それ〳〵に適當な對策を一致して講ずるといふやうなところまで、ぜひ現在の家庭婦人を一人殘らず誘ひ出したいものである。

時々考へさせられることであるが、全ての婦人が――特に家庭婦人の全てが一致して參加出來る社會改造の運動としてかうした方面に主婦の關心を求め、進んでは、實際運動にも誘ひ合はせるといふことは、それほどに困難なことであるだらうか。

否々、今日のやうに生活難のはげしい切迫した事情のもとに於ては、家庭婦人をその消費經濟生活の實際方面から促し立てゝ、われ〳〵の消費生活をもつと合理的にしもつと能率的にするために誘ひ合はせる運動は、熾んにならぬ筈がないと思ふ。婦人の政治運動も、かうした婦人の實際生活に卽した方面から、大衆的に行はれてこそ、初めて、有力に社會的にも動いてゆくことが出來るに違ひないし、所謂參政權運動に未だ冷淡な家庭婦人をも、一つ〳〵實際問題を通して動かしてゆくならば、案外早く、大衆的な婦人の勢力を作すことが出來るであらうと考へられる。

むしろ、政治運動にしろ、敎育運動にしろ、勞働運動にしろ、廢娼運動にしろ、從來社會的に相當大きな聲を揚げてつゞけられて來てゐる婦人運動が尠くない中に、最も一般的な婦人の生活と關はりの廣い、そして、最も實際的な經濟方面の運動――臺所から出發する社會改造の運動が、これまで殆んど行はれないでゐたことは、不思議である。

家を出でゝ、職業に就く生活も、ひとりでに社會的關心を强要させられる點で、婦人にとつてまことにいゝ經驗である

と思ふのであるが、ものを買ふ生活は、それにも況して、もつと／＼社會的聯關が深く、廣く、興味深い生活ではないか我々が米を買ひ、砂糖を牂め、銘仙一反買ふ生活にも、國際的な經濟界の大波小波がひた寄せて來て居る。出兵だ、凶作だ、内閣更迭だと、こと／＼にわれ／＼の消費生活に影響の來ぬといふことはない。ものを買ふ生活を通じて我々が、今の世の中の動きを知り、そのからくりを探ることもまことに容易なことである。婦人に社會的關心を養成するために、婦人の生活に最もぴつたりしたこの消費生活方面の近道を、從來の婦人運動者が看過してゐたといふ事は何といふ大きな過失であつたらう。

絶封に戰爭に反對だ

廣島縣安佐郡大林村の女子青年團は、青年訓練所を見學して長官から話を聞いて感激のあまり、「青年訓練所に出 席せぬ青年とは結婚しない」といふ決議をしたといふ。

青年訓練所や女子 青年團がもと／＼青年男女を軍國主義漬けにしやうとする反動機關であつたことは、今更云ふもおろかな話であるが、ます／＼その魔手を振うてかういふ決議さえ結ばせるやうになつた、といふ事に就いて婦人側がだまつてこれを見てゐていゝだらうか！

國際的な申合せが成立して戰ひますまい（不戰條約）といふ聲言に署名捺印をした。然しその裏で――たゞにわが日本許りではない のであるが――軍備を充實させるためにヤツキとなつてゐる。國民を總動員して軍事教練に夢中なのである。婦人側がだまつてその尻について行つていゝだらうか？ 否々！

われらの母性は、戰爭反對！ を叫ぶ。絕對に戰爭に反對して、――戰爭に備へるための一切のいとなみを拒否して平和を死守せよ、あくまで永久平和を確立するために鬪へとわれ／＼に命令するのである。わが血わが涙で戰爭の慘害を嘗めなければならぬ婦人として、何でうか／＼と戰爭がはじめられやう。多くの男子が政治的な野心から、巧名心から、人のいのちを的の慘つたらしい戰爭に、まるで熱病患者のやうに馳け出さうとしてゐるとき、最後まで踏みとゞまつて平和を叫ぶ勇氣をもつもあのは何といつても婦人のもつ母性の本能でる。

婦人よ、何者にも亂される事のない衷心の叫びが何と云ふかいつの日いかなる場合にもその聲の前に勇敢に起て！



ユナイテッド、アーチスツ會社提供
メトロ・ゴールドウイン・メーヤー映畫
ヴイクター・シーストロム氏作品

故郷の土

誌上映畫

原名　「偽りの塔」
原作　セルマ・ラゲロフ女史
脚色　アグネス・クリスタイン・ジョンストン女史
　　　マクス・マーシーン氏
監督　ヴイクター・シーストロム氏

配役

グローリー	ノーマ・シエラー孃
ジヤン	ロン・チエニー氏
ラース	アイアン・キース氏
カトリナ	クレア・マクドウエル夫人
オーガスト	ウイリアム・ヘーンズ氏
エリク	デヴイット・トーレンス氏

梗概

ジヤンは貧しいが、溫良な百姓であつた、妻カトリナは姙娠してゐる。貧しい百姓にとつて、子供が出來る事は嬉しい事ではない。ジヤンはそれを困つた事だと思つてゐた。

月滿ちて、生れたのは女の子、グローリーと名をつける。いくら厭だ厭だと云つてゐても、ジヤンには、自分の子供は可愛かつた。匐へば立て、立てば步めの月日は矢のやうに流れてグローリーは十八の乙女になる。花恥づかしい楚

々たる姿は、流石、鄙でも人目を牽いた。

娘には、心に思ふ男がある。それはオーガストと云ふ純良な青年。しかし茲に豪家エリクの甥、ラースと云ふ者があつて、同じ想を娘にかけた。エリクが死んで後ラースはそれとなくグローリーに云ひ寄つたが娘の心は動かないので、エリクが、ジャンに貸しつけた債權の督促にかゝつた。「十月一日までに返濟しろ。しなければ差押えるぞ!」

父の苦しみ悲しみを、見るに見かねたグローリーは、心を決して都會へ出やうと云ひ出した。父も、オーガストも、引き止めたが、娘の心は變らなかつた。それではと寂しい胸をさすつて娘を旅立たせる事にした。娘をのせた船が動き出した時、グローリーを驚ろかしたのは、ラースが同じ船に乘り込んでゐた事である彼は彼女に挑みかけた。そして………

× ×

故郷の父と母とは十月一日を待つてゐた、娘の歸る日を只管に。さて愈々其の日が來て、二人の前に現はれたのは、娘ではなくてラースであつた。彼はジャンの債務が都から送つて來たグローリーの金で、支拂濟になつてゐる事を知らせた。グローリーは終に歸つて來なかつた。



待てど暮らせど、娘は歸らない。その中に幾年かは過ぎて、母は頭に雪を頂き父は痴呆にかゝつて了つた。凡ての人々が忘れた頃、圖らずも訪れたのは、脂粉

の装ひ華やかなグローリー……都へ出ると間もなく淪落の淵に身を投じたグローリーであつた。母は朧にそれを知つてゐた。そして娘が、己れを汚してまで家の債務を辨濟した事も、しかし、今は、世の誇りが恐しかつた。母は、溫い心もて娘を迎へ抱く事は出來なくなつてゐた。涙ながらに「都へ歸れ」と云ひ聞かす。

× ×

あゝ、長い年月の、如何に多くの變化を故鄕の人々に齎らした事よ！ しかしそれでも變らなかつたのはオーガストの心だけであつた。彼は今も一途にグローリーを思ひつゞけてゐた。娘もそれを知つた。けれども蹂み躙られた身を顧みる時、何でオーガストの純情を受け容れる事が出來やうぞ。すべてを諦め、石をもて追はれて、彼女は村を立ち去つて行くその船路の門出にあたつて、彼女は見た知つた、父とラースとの死を！

やがて、故鄕の土は、再びグローリーを迎へた。彼女は過古を忘れ凡てをゆだねて、愛するオーガストと二人、樂しく土を耕して暮らす人となつた。

映畫「故鄕の土」を見る

映畫「故鄕の土」を誌上に紹介するについて、ぜひ見ておきたかつたのと、又非常によいからとすゝめられたので、一夕を割愛した甲斐は充分にあつたと思ふ。全く理窟なしに觀衆の心をグン〳〵吸ひつけてゆくそのあざやかさに參つてしまつた。

ジャンが子供の生れる事を喜ばないで、産婆が彼の膝に赤子をのせても見向きもしなかつたのに、ふと、その無心な愛らしい顏をのぞきこむと共に、親としての熱烈な情愛がこみ上げて來て折から窓邊にさしこんで來る月光の中に、赤子を捧げて喜びの聲をあげる樣もわざとらしくない敬虔な思ひに打たれて彼と共に祈を捧げたい氣になつた。この日から貧しい彼等の家庭にもこの新らしい家族がどんなに大きな慰めとなり又張り合ひとなつたことか！ グローリーはその名の如く一家の榮光であつた。かうして「淸く美しくと」いふ父のねがひをそのまゝに、グローリーは、無邪氣に美しく生ひ育つて十八の乙女となる。

ところが慈愛深く村人にしたはれて居る地主のエリクの死と共に、エリクの甥で腹黑いラースに計られて、グローリーは父母と戀人に別れて遠く都へお金をもうけに行かうと雄々しい決心をして船出する。心づくしの小さなスミレの花束をおくつて別れを惜しむオーガスト、娘に涙を見せまいとして物かげにかくれてしのびなく父の心、はなれ行く船を飽かず眺めつくす老いた父と母のその淋しい姿……

しかも運命は彼女にあまりにつらかつた。數年の後、昔の貧しいけれども淸い乙女は富める汚れた女となつて故鄕の土をふまねばならなかつた。頭の狂つた父は、かつての日彼女を女王に見立てゝ遊んだ時のやうに、今ならば「淸く美しき我等の女王」がお歸りになられたと喜び騷いで人々に涙を催させる。併しそれにもまして哀れなのは、慈愛の涙をおさへて心ならずも。

「都へかへりなさい」

といはねばならぬ母の切ない胸の中である母と娘の思ひも知らぬ故郷の人々は口々にのゝしつて、

「この村は正しい人のみの住む所だから、お前の様な汚れた者を入れる事は出來ない」

と宣言する。その憎々しさは見て居る者にもむつと腹が立つて來るのだつた。そして心なき者の投げる石に追はれてまた都へと再び歸らぬ旅に上る。それを知つた父は夢中で我娘のあとを追ひ、彼女が乗船するやいなや海中にとびこんで溺死してしまふ。同時にラースもあやまつて甲板から落ちて海中の藻くづとなつてしまつた。かくてグローリーは一切のみにくい過去をわすれ愛するオーガストと二人なつかしい故郷の土をたがやして、殘つた母と共に樂しい生活をする身となつた。この最後のシーンもよかつたと思ふ。ことに美しい月が雲間がくれにさし出て來ると、彼女の生れたときの光景と思ひ合されてしんみりとする。

物語の筋も表現もよいし、私共に何かしら考へさせないではおかない。親の愛、戀愛、人の心の計りがたさ、いはゆる正しい人の冷たさなど、頭が痛くなる位いつまでも／＼私は放心したやうに考へこんでしまつた。

そして、

「彼女のした事は道徳的標準からは悪い事ではあるかも知れない。併しその罪の重荷は、はたして彼女のみに背負はせるべきものであらうか？ 正しい者として大きな顔をして居る者が、一體どれ丈け彼女よりすぐれて居るといふのか？」

とさけびたくなつて來た。

とにかくぜひ一度は見るべき映畫だと思ふ。ことに多くの若い人々に見てもらいたい。おそらく何等かの收穫は得られることゝ信ずる、

最近かうしたよい映畫が、どん／＼封切されて、一頃から見ると映畫といふものゝ價値がよほど高められて來たことは大きな喜びである。殊に世界文學上に千古の光を放つた名作が、續々と映畫化されて、文字の上で受けるとは又別個の感を與へられることを嬉しく思ふ。尤も人によつては俗化されるからと厭ふ人もあるけれど、私はさうは思はない。

崇高な文學を文字の上で味ふことの許されない多くの人達のためにも、もつと名映畫が製作され普及されることが、必要なのだ。――しかもスクリーンの上にうつし出される風景や人物によつて、より痛切に私共の思ひは高められるものだから。

この様に大人向のものとしては推奬したい名畫もふえて來て居るのに、兒童のためには殆どかへりみられて居ないやうなのはどうしたことなのだらう。

先頃東京市の教育局あたりの肝煎りで、兒童映畫デーが實施されたが、私もその初めの日に見に行つて全く情けない氣がした。あんまり兒童の徳性を無視した映畫が傲然とがんばつて居るのだもの。どれもこれも軍國主義的色彩の强い戰爭ごつこ氣分のあふれたものばかりで、無邪氣に笑ふやうなのが少なかつた。

しかもあの空氣の悪いところに定員の二倍も三倍もつめこんで、やかましい騒音の中で、何が兒童映畫かと云ひたかつた。一日も早く、子供らしいあどけない兒童專門の良い映畫が、專門の映寫場でよい音樂と共に觀賞される日が來るやうに多數の兒童のために切望して居る。（フミコ）



月の光りの中で

（子供のよみもの）

入交總一郎

1

月のいゝ晩でした。深い森の中で、大ぜいのけだものたちが、樂しさうにお話をしてゐました。ぐるつとめい〳〵が車輪に無作法に坐つて、並べられたご馳走をべちやくちやと食べながら、お話のあひまには、みんなが大きい笑ひ聲を無遠慮にたてました。夜が更けて月は森の上に來ました。そして、木の間をもれてそこを明るく照らしました。

「あゝ、いゝ月だ。」と、うさぎが赤い瞳をあげていひました。

「ほんとだ。」と、くまは、うさぎの言葉にひきつけられたやうに大空を見あげて、

「ほんたうだ。」と、もう一どいひました。

すると、みんなは、べちやくちやと食べてゐたご馳走を下に置いて、森の上を見ました。

「きれいだ。」

「きれいだ。」
「きれいだ。」
　思はずみんなは、ひとつの言葉に引つぱられていくやうに輕い溜息をしました。そして、默つて、うつとりと、どこまでも澄みわたつた月のほの青い光りを見てゐました。
「何とうつくしい色ではないか。」と、そのとき、しゝがいひました。
　みんな默つたまゝ、また、月を見ました。心からうつくしいと思つて見ると、不思議にも、いまゝでに見てゐた月とは全く別な、いま始めて見るやうな月に見えました。
「どうだ、この月のやうに、われ〳〵も、うつくしい清々とした心もちになつてみたいものだ。こん晩、ひと晩でもいゝたつたひと晩だつていゝ――」
　しゝは、その月の光りの中へ、頭をつゝ込んでいくやうな氣もちで、柔かい聲でいひました。
「じつに、いゝことだ。」と、とらが、すぐに贊成しました。
「じつさい、いゝことだ。」くまがいひました。
「よろしい、やらう。愉快なことに違ひないぞ。」と、ぞうがいひました。
「自分で惡いことでないと思つてゐても、他の目から見ると惡い行ひをしてゐたかも知れない、さういふことを話あふことは、こん夜のやうな、かうしたうつくしい月の光りの中で大いにやるべしだ。」と、きどり屋のきつねがいつて、笑はれました。
「ざんげ。」
「ざんげは面白いね。」
「ぢやあ、はじめよう。」
「たれから――」と、たぬきが、さういつて一座を見まはした。
「さうだな、大ぜいゐるから、とても、みんなといつても出來ないなあ、では、くじ引きで、こん晩は二つだけのお話にしようではないか。」と、うしがいひました。
「さうしよう。」と、そこで、そこらの木の枝をぺし〳〵と折つてから、くじをこしらへました。そして、めい〳〵が何のわだかまりもない心で引きました。
「どんなくじが、お話をする番だ？」
「おや、おれのは、ばかに短いなあ。」と、きつねが、みんなのくじと見くらべていひました。

「あ、その短いやつが、お話をするんだよ。ひとつはきねだと、それから、もうひとつは、いつたいだれが引いたんだい。」
「おれだよ。」と、しゝが、にや／＼笑ひました。
「きつねと、ししが。面白いぞ。」
「うん、なか／＼面白いな。」
「ぢやあ、きつねからお話をはじめてくれ。」
「よし。」と、きつねは、水をいつぱい飲んでから、坐りなほしました。そして、「エヘン。」と、咳ばらひをしました。
「おい、きつね、エヘンぢやないぞ。コン／＼といふもんだ。」
たれかが、さういひましたので、また、大笑ひになりました。

2

「ぢや、ボツ／＼と話さうかな。」と、いつて。「おれには格別面白いお話もゝつてゐないし、でも、冬になると、第一に困つちまふことは、食べ物だなあ。」
「そりや、たれだつて困ることとさ。」
「冬が來て、そこらがまつ白くなつて、谷か路かがわからなくなると、おれは、雪を踏んで山をおりていつた――。」

「どこへいつたんだい。」と、せつかちのうまがきゝました。
「默つてゐろ、言はずとも知れてる、里へいつたのさ。」
「さては、こいつめ、鷄どろぼうだな。」と、うまは、さういつて鼻の先きで、ヒヒンと笑ひました。
「うん、殘念ながら、さういふわけだ。しかし、しかしだね。」と、きつねは目を細くして、一座を見まはしました。
「どろぼうといつたつて、始終はやつてゐないさ、それも冬の寒いさ中で、山の上に食べ物が無くなれば、さうでもして、食べなくちや、死んでしまふからな。」
「だつて、どろぼうは、一等惡いことだぜ。」
いまゝで默つてゐましたひつじが口をはさみました。
「そりや、きみ、なるほど惡いことに違ひない、そこで、しかしだね、そのどろぼうも、時と場合によりけりだ。なぜなら、ちやんと働けるものが、不精にも働かないで、どろぼうを稼ぐことは、むしろ憎むべきことだ。が、働いても働いても、また、働けなかつたりして、食べる物もない、惠んでくれるものもない、といふときには、止むを得ないちやあないか。」
「それは、きみの理窟だよ。」

「理窟だつてい、——凡そ生き物は、食つて、その日を過ごせば仕合せだ。」
「きみは悪魔の弟子だ。」
「ふん、きみは、キリストにかはいがられたな。ざまアみろしかしだよ。きみ。これはおれらの悪いためぢやない。みんな、神さまがいけないのだ。」
「と、言ふと。」
「たとへばだね。こゝにひとつの物を神さまがこしらへたとする。それから、また、別なものを、向うへも、あしこへもこしらへた。さうして神さまは、これでいゝと呟やいた。そして満足した。ところが、豈計らんやだ。それらのものからひとつづゝ、大切な物をわすれてゐたことに氣がつかなかつたのだ。」
「それは何だ。」と、とらが、怒鳴るやうにいひました。
「不仕合せだね、われ〳〵は、そのひとつだけで、みんなの仕合せをお互ひに奪ひ合つてゐるのだ。」
「だから、それは何だ。」
「どろぼうも、仕方のないことさ。」
「こら、早く、わけを言はないか。」
とらが、きつねの襟首をぎゆつとかんでおどかしましたので、びつくりしてしまひました。
「言ふよ、手を放しておくれ。」
「さあ言へ。」と、とらは、口ひげをぴり〳〵と動かしました。
「他でもない、食べ物をわすれてゐたのさ。」
「ばかめ、このばかツ。お前はじつに狡いやつだ。さあ、脱線せずに、さつさとお話をしろ。」
しゝは大きい目をいつそう大きくして睨みつけました。ぞうは、みんなから、さん〴〵にいぢめられてゐるきつねを見て、ひとりで、にこ〳〵笑つてゐました。
「だつてイブも——」
「それがどうしたんだ。」
「あれも、食ふに困つて、禁斷の果實つてやつを、食べたのさ。」
「アツハツハツハ。」
「ハツハハ。」
きつねの眞面目な顔を見ると、みんなは、どつと、笑ひころげました。
「さて、あれは——」と、きつねは、笑ひもしないで話しは

じめました。「さうしたわけで、どろぼうは時と場合で、決して悪いことではないと思つて、里へおりていつたのだ。」

「どろぼうたあ、お前のことさ。」

「いやになつちまふなあ。」

「なぜ？」

「どろぼう圖々しいつて、よく言つたもんだ。」と、また、たれかゞいひました。

「あれだ、一言目には、どろぼう、どろぼうつて、言ふんぢやないか。」

「ほんたうのことさ。」

「おい、きつねそんなことをしてると、いまにお巡りさんにとつゝかまるぞ。」と、さるが、鼻をクン〳〵ならしました。

「詰らない――」と、きつねは、不機嫌な顔をして怒りました。

「全くだ。」

「つまらない。」

きりんが、長い首をのばして、あくびをしましたので、みんなは手を叩いてはやしました。

「よさう、ばかにしてらあ。」きつねは、プン〳〵と顔をまつ赤にして怒つてしまひました。

3

「おい、ほんたうに怒つたのかい。」と、ぞうが、やはり、細い目にしはをこしらへていひました。

「うん、怒つてるよ。だつて、おれのお話がめちや〳〵になつたんだもの。」きつねは、さういつて、ごろりと横になりました。

「ふん、面白くもないや。」

と、みんなは、さういつて、また、ご馳走をぺちやくちやと食べはじめました。あぐらをかいたり、足を投げ出したり横ひざをしたり、たれも満足にきちんと坐つてゐるものがありませんでした。そして、たれも、それをとがめようとするものもありませんでした。自由なその振舞を木の枝のすき間から、月の光りが笑つてゐるやうに、チラ〳〵とさしてゐるばかりでありました。みんなは、しかし平氣で、ぺちやくちやと食べました。

「どろぼうの話を聞くなんて、いやアなこつた。」と、ひつじが言ひ出しました。

「悪いことではない、が、いゝ氣もちはしないね。」と、たぬきがいひました。

そこで、みんながまた騷ぎはじめました。ひつじに味方するものと、そして、たぬきに加勢するものとが、めい〳〵ご馳走を口の中に運びながら、いひ合ひをしました。

「まあ、そんなことは、どうだつていゝぢやないか、われわれには、少くとも面白いことでない、それよりかこんどはしゝのお話を聞かうではないか。」

「あゝ、さうだつた。」

「けど、どろぼうのお話ではないだらうな。」

「また、喧嘩になるぞ。」

しゝは笑つて、みんなの言ふことを聞いてゐました。

「この月の光りのやうに、美しいお話をしなくちやいけないよ。」

「うん。」と、しゝは點頭きました。

「それぢやあ、お話をはじめてくれ。」

「あゝ――」

しゝは、頰へ落ちてくる毛をかきあげながら、ぢつと、木の間から、大空の月を見あげました。しゝの心は、非常にさわやかになつてゐました。さうして、「さて」と、しゝが言ひはじめますと、みんなは、またもや、ご馳走を下に置いて、俯向いて耳を傾けました。

4

「昔、おれは、ふとした間違ひから人間を食べたことがあるがね。」

「人間を？」

「あゝ、それも人間の子供なんだがね、いま思ひ出すと、じつに怖しいことであり、かはいさうなことだつたよ。」

「うん、そらあ、ひどいことだ。」

「怪しからんことをしたな。」と、ぞうとくまとが、笑ひ聲で言ひました。

「どうだつた、さぞ、甘かつたんだらうなあ。」とらが、かゞやかしい目をしてきゝました。

「そらあ、おいしかつたよ、わすられない。」

「さうだらうとも、大たい、人間は見るからにして、うまさうだからな。」

「さうだ、そして人間ほどぜいたくで横着なやつはないぜ。われ〳〵を常に食べ、鳥るいや魚るいを食べ、野菜をどつさりと食べてゐるんだから、そりや、きみ、おいしいにきまつてゐるんだよ。」

「おれも、一ど、ぜひとも食つてみたいもんだなア。」と、よ

だれをタラ〳〵と流して、とらがいひました。

「さてと、その日は、朝から不仕合せにも何ひとつ食べ物が無かつたのだ。それで、お正午近くまで、家の中でごろ〳〵としてゐたけど、だん〳〵、めまひがするほどお腹が空いて來たんだ。そんなことならい〻がね、腹の虫めがキユウ〳〵と泣くのさ、で、仕方がないので、水でも飲んで今日を過さうと思つて、フラ〳〵と外へ出て、一マイルほども向うの川へ歩いて行つた。すると、どうだ、大へんにい〻匂ひが、プーンと、おれの鼻を掠めるぢやないか、そのとき、おれの目は光つたな、キラリと物凄いほど光つた。さうして匂ひを追ふて、まつしぐらに駈けつて行つたのだ、そこには、かはい〻人間の子供が、すや〳〵と寢てゐる他に、たれひとりもゐなかつた。で、おれは、われをわすれて、ひと息にやつてしまつたんだ。そして、川べりにおりて、お腹いつぱいに水を飲んだといふことさ。」

し〻はさういつて、深い〳〵溜息をしました。

「それから――」

「それでおしまひさ。」

「どんな氣もちがするんだね、今――」

「さうだな、そのときは、とても素晴らしい愉快な氣もちではあつたが、いまでは、考へるも不愉快なものさ。」

さうして、その子供の親の歎きを思ひました。自分の子は生れて三日目には、谷底へ落してまでも、けだもの〻第一の強いものにしてやらうと試みる親ごころより、人間の子供に對する情は、もつと〳〵深いものであらうと考へずにはゐられませんでした。

「ほんとに惡いことをしたもんだ。」と呟きました。

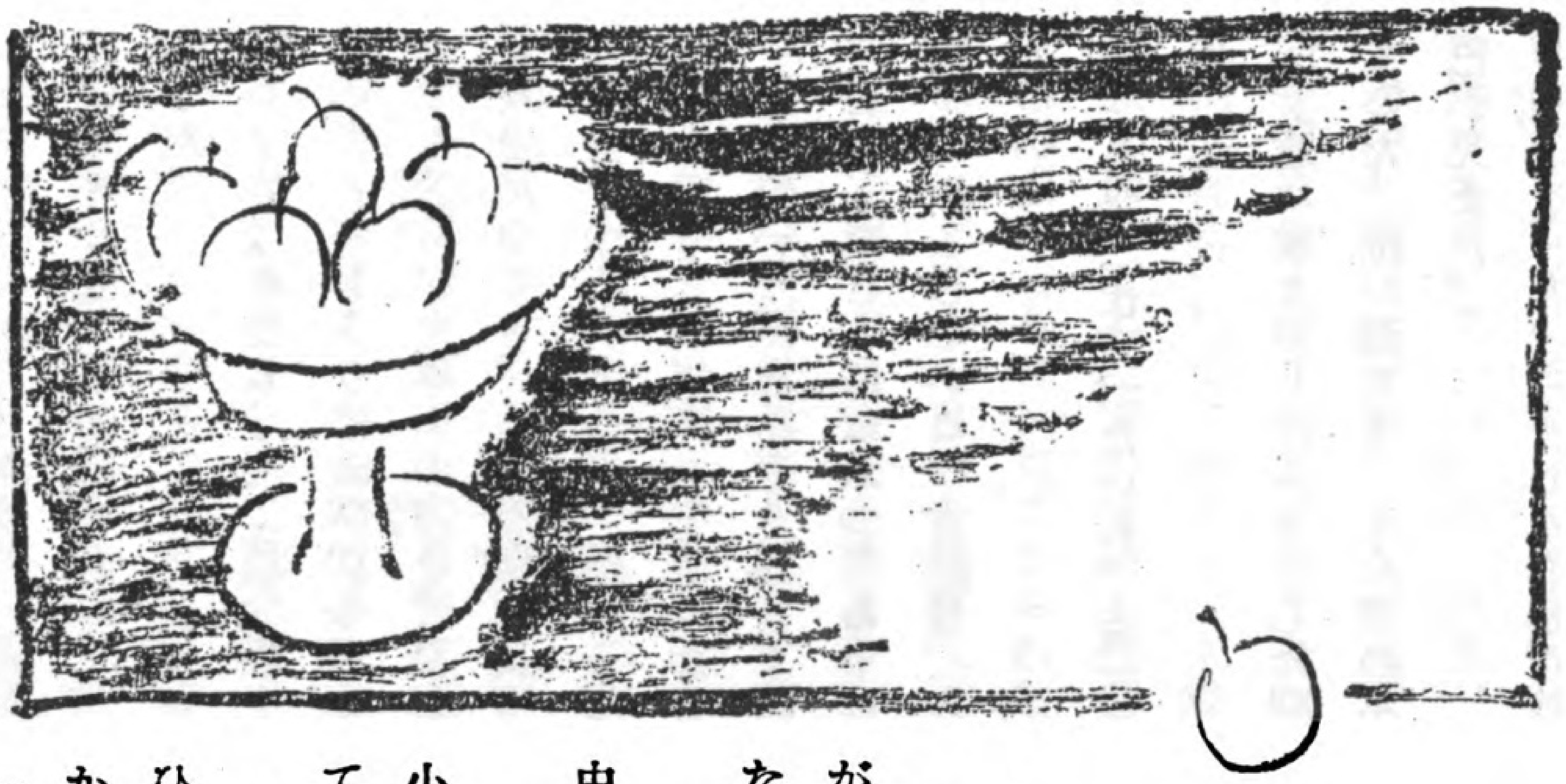
「それでい〻んだ。それで、きみの罪は、すつかり消えてなくなつたわけだ。」

ぞうが、慰めるやうに言ひました。そこで、みんなが、またいつそうに賑やかに、ご馳走をべちやくちやと食べはじめました。氣のめいるし〻の心を引き立てるやうに、くまは、愛嬌よく調子外れな唄をうたひました。そのとき、ひとりすねて寢てゐたきつねが、むつくりと起きあがりました。

「なんだい、ばかにしてゐらあ、どろぼうのお話を嫌つて置いて、人殺しのお話に涙を流して喜んでゐらあ、畜生、ざまアみろ。」

さう言つて、きつねは、前にめつたお酒をガブ〳〵と、やけにのみつゞけました。

けれども、一座はもとのやうに賑やかになりました。愉快に、無作法に、何の遠慮もなく、ほの青い月の光りの中で、べちやくちやとご馳走を食べました。(をはり)



姉妹

池田みわ子

今日も街は太陽の光を見る事が出來なかつた。

うす墨色をした陰鬱な雲が、一面に掩ひかぶさつた空からは、絶えず糸のやうに細い雨が落ちてゐた。幾日もの雨にぬれたアカシヤの並木は、一樣に枝をすぼめて、おしだまつたまゝ靜かに通りに立つてゐた。

もう七月も半ばを過ぎたといふのに、溫度は恐ろしく下つてゐて、單衣一枚では部屋の中にゐても震へる程であつた、

七つばかりの机と、それを取り卷くいくつかの椅子が、所せまげに並べられてあるこの小さなカフエーの中では、四五人の女達が眞中の卓子に集つて、天氣のよくない事についてそれ〴〵の愚痴をこぼし合つてゐた。

季節はづれの雨と寒さとは、この小さなカフエーに遊ぶお客の數をめつきり減らして了ひ、彼女達の心に陰鬱な不安を與へてゐるのであつた。彼女達のなかには、髮結賃どころか風呂賃にさへも差支へる者が幾人もゐた。

「あゝあ、ほんとうに何もかもいやになつて了ふ。」

根のゆるんだ、日本髪の一人が兩腕を差上げて、欠伸まじりの大きな聲で叫ぶ樣に云ふと、どさりと元の卓子に腕をおろした。

「あ。きら。めましよよ、さだ。めーなら。。だ。フン」

いま〲しさうに云ひ切るいま一人のあとについて、

「でも貴方がたはいゝ方さ。私をごらん。今日も家から拾五圓入用だつてさ。また拇指の長つたらしい厭味をきくんだと思ふとげつそりするよ。殖えるものは借金ばかりだし、いつそ川へでも入つて死んで了つた方がいゝわ。」

と他の一人が思ひきり惡るく話をまた後戻りさせる。

二十二だと人には云つてゐるけれど、本當は二十五六にもなつてゐるらしいこの女給は、左樣云つたあとでフツと溜息をついて、

「でもね、仕方がないわ。家ぢや本當に困つてゐるんだもの。」

女達は彼女がしみ〲とした調子で云ふのをだまつて聞いてゐた。誰の顔にも、てんでの不幸を思ひ出したやうな暗い色が見えた。

禮子は一人、そうした群からは少し離れた隅の卓子で聞くともなしに先程からの話を聞いてゐたが、何かしら胸のふさがる樣な思ひがした。彼女はいつかその女給が、

「あたい、女郎に賣られるかも知れないよ。でも、親のためならどんな汚い商賣でもするつもりだからいゝわ。」

といつた事を思ひ出した。

禮子はこのカフェーに住込んでまだ間が無かつたが、お化粧が上手だといふ事や、東京から來たといふ事や、いろ〲な珍らしい話を澤山知つてゐるといふ事などで、朋輩達から特別な眼で見られてゐた。生れつき口數の少ない彼女は、晝間の暇な時間を、大抵ペンを動かしたり、本を讀んだりして過してゐた。今も彼女の前の卓子には、ハウプトマンの「寂しき人々」が置かれてあつた。然し彼女の眼は、もうよほど前からそれを讀んではゐなかつた。彼女も何時の間にか、他の朋輩達と同じ樣に、お金の事を考へてゐたのである。

ほんの一月程前、彼女は東京を出て、樺太にある夫の兩親の家へ、生れて初めての長い一人旅をした。その原因には、體の弱い彼女が、この暑い夏を東京で送るよりは、涼しい樺太で送る方がいゝだらうといふ事や、朝から晩迄、汗と脂で働いてゐる夫の實家の生活を手傳つて、まだ昔のブルジョア

氣質から抜け切らない自分の性質をため直さうといふ事もあつたけれど、又一つには、此春、夫が病氣をして二百圓ばかりの金を使つたため、二人が東京で暮してゆくには、到底經濟が許さなくなつたといふ大きな原因もあつたのである。

　然し樺太へ行つてみると、土地の不景氣は意外に甚しく、魚菜を商つてゐた家の生活も極端に苦しかつた。彼女はとてもそれをまともには見てゐられなかつた。何か自分でも金儲がしたい。せめて自分の食事代だけでも稼ぎたいと思つた。けれども樺太では彼女に適當な仕事などは一つもなかつた。で北海道のS街へ來て、今まであまりに知らなすぎたこの世の現實を知り度いといふ心持と、併せてお金が欲しいといふ心持ちとで、このカフエーに、一人のウエートレスとして一週間程前から住み込んだのであつた。

　で、東京から暑さの去る頃には、彼女もまた夫のもとに歸つて共に勉強するために、かなりの金をつくらなければならなかつた。それから又、都に殘つて、激しい暑さと戰ひ乍らろくにたべるものもたべずに勉強してゐる夫の事を思ふと、出來る事ならその小使だけでも送つてやりたかつた。

「なあに、死にやしないさ。お前はお前で良い體驗を得て來るがいゝ。」

　と、元氣でそうは云つてゐたものゝ、時とすると子供の樣に無茶な事をやりかねない夫の性質を知つてゐるだけに、彼女はかなりの不安を持たずには居られなかつた。

「二十圓ばかりあつたら――。」

　思はずそうつぶやいたとき、彼女は左の中指にあるダイヤの指輪に驚いた。それはまだ彼女が女學校に通つてゐたころ生家の父が東京からの土産に買つて來てくれたものであつた。突然入口の扉がさつと開いて、夕暮の街から二人連れの男がはいつて來た。

「いらつしやい。」

　女達は一齊にはじかれた樣に立ち上つた。禮子は前にあつた本を卓子の下におしかくすと、急いでコンパクトの蓋をあけた。鼻のあたりを直して、禮子はいつもの樣に客の方へよつていつた。

「いらつしやいませ。」

「よう、今晩は。君の名は何ていふのだい。」

「れいちやんよ。どうぞよろしくね。」

「はゝあ、れいちやんとはハイカラだね。握手をしよう。」

年かさの男がぐつと彼女の小さな手を摑んだ。

「れいちやん。僕とも握手しやう。」

若い方も負けずに手を出した。商家の若旦那といつた感じのするその色の白い男は、彼女の手をじつと握つたまゝ少時離さなかつた。

握手。それは彼女達が何時もするごくありふれた戯れであるのに、禮子をじつと見つめたその男の眼には、どこかたはむれには强すぎる處があつた。禮子はそれを見た瞬間、激しい嫌惡と怒とを感じてすつと手をひいた。

この二人のお客には今夜はじめて會ふにも係らず、禮子はどこかで一度會つたことのある樣な氣がしてならなかつた。男達は如何にも愉快さうにしてゐたが、あまり冗談をいつたり、戯れたりはしなかつた。そしてどこかに遊びなれない樣な處がみえるのであつた。

女たちはてんでに、これが喰べたいとか、あれが欲しいとか云つてねだりはじめた。二人は別にいやな顔もしないで女達に好きなものをとつてくれた。

日本酒をのみ乍ら、男達は、酌をしてゐる禮子に、東京で何をしてゐたゞの、何故此方にやつて來ただの、何處で生れたゞのといふ樣な事を、かなり興味をもつて聞き初めた。禮子はその度に、どういふ風に嘘を云つたら良いかとずい分惱まされた。あまりうるさく聞かれると、しまひには腹が立つて、毆りつけてやり度い樣な氣さへして來るのであつた。

然し彼女は、何時の間にか、この懷中の溫かさうな客が、せめて二圓ばかりもチップを呉れたらいゝがと、歸つて行くときを樂しむ樣な氣持ちになつてゐた。

「れいちやん。何處へいくんだ。こゝにちやんと座つてゐてくれ。」

二人はひどく彼女が氣に入つたらしく、十時頃になつていくらか客の立て込んだ時にも、彼女を傍から離さうとはしなかつた。

まだ心からこうした事に平氣になり切れない禮子は、この二人が段々薄氣味惡くなつて來た。彼女は、斯うした處へ來る客が一番しまひには、何を要求するかと云ふ事をよく知つてゐた。

然し、おそくなつて、他の客が一人もゐなくなると、男達は歸つて行つた。そして禮子の懷中には、歸りしなに若い方が押しつけて行つた拾圓紙幣が入つてゐた。

「あの男は禮ちゃんに氣があるんだよ。でなけりや、いくら氣前がいゝつたつて、拾圓は多すぎるわ。」

「禮ちゃん、本當にあいつらは禮ちゃんに何にも云はなかつたの。まあ、何て鼻つたらしなんだろ。馬鹿にしてるよ。」

「どれ？　本當にお札だよ。お札だよ。あんたにはいゝお客がついたわね。でもしつかりしなくちや駄目よ。そうやつていまに何とか云つて來るに違ひないんだ。何處の世界に男がたゞで拾圓もくれるもんかね。」

「何とか云つたら他へドロンすればいゝぢやないの。遠慮なしに貰つておくさ。ねえ禮子ちやん。そんな事をいち／＼氣にかけてゐたら、商賣なんか出來ないよ。」

朋輩達は、一枚の紙幣をもつて、氣味惡るげにつゝ立つてゐる禮子を取り巻いて、てんでにそんな事を云つた。禮子の頬は思ひがけない出來事にいくらか昂奮して赤くなつてゐた。

新米の禮子が大金を手にしたといふので、

「れいちゃん、お手柄だねあんたは若いし奇麗だから、これからいくらでも良いお客が來るよ。」

女將までが帳場の窓から顔を出してにつこりした。

彼女達が店のあと片付けや掃除をすまして二階の寢部屋へ上つていつた時は、もう二時に近かつた。

淡暗い電燈の下で、皆が色々な事を饒舌りながら、着物をたゝんだり、布團を敷いたりしてゐるとき、

「れいちゃん、れいちゃん。」

と呼ぶ聲が暗い窓の外から聞えて來た。然し禮子は、あちこち飲み廻つて、偶然この家の前を通りかゝつた顔なじみの客が、まだ二階に明りがついてゐるのを見て、惡戯に呼んだのであらうと氣にもしなかつた。然しふとその呼聲が、何時の間にか彼女が生家にゐた頃呼びならされてゐた名前に變つてゐたとき、思はずぎよつとして立ち上つた。そのまゝ彼女は走るやうに階段を下りていつた。

開け放された扉口から暗い外をのぞくと其處には白い寢卷を着た亭主が立つてゐた。雨は止んで、しめつぽい夜氣がひえ／＼と感じられた。禮子が扉口に立つてゐるのを見た亭主は

「俥までもつて迎ひに來てやがる。」

とぶつ／＼口小言を云ひながら入つてきた。呼んだ男は亭主に怒鳴りかへされた後らしかつた。

寢部屋へもどつて、朋輩と一つの床にもぐりこんだ禮子は、頭が冴えてなか〳〵眠れなかつた。節穴だらけの天井にとまつてゐる蠅の群をじつと見つめながら、彼女は何時の間にか表の物音にきゝ耳をたてゝゐた。

――自分の本名を呼んだ人は誰だらう。この土地で自分の顏を知つてゐる樣な人は無い筈なのに――

何だかたつた今の出來事が嘘の樣な氣さへして來るのであつた。幼い頃から呼びならされた自分の名前。それは彼女に故鄕の大きな家と庭と、其處に住む肉親の人々とを、たまらなくなつかしいものに想ひ起させた。殊に、彼女が居なくなつてからといふものは、一層老いて涙もろくなつたといふ母の姿が、あり〳〵と眼の前に浮んで見えた。そして、何時もの前かゞみな癖までが眼について、容易に離れやうとはしなかつた。が、それはやがて、邸宅が出來ても庭が出來ても、藏が建つても、矢張百姓の樣によく働く、正直で一徹な父親の姿に變つていつた。而の皺も深く、頭髮は眞白に變つて、如何にもその顏は惱みに充ちてゐた。禮子の胸はあやしくうづいた。しかし、その次の瞬間、彼女は永遠に自分を放逐すると決議した、いかめしい親族會議の光景を想ひ出した。

――何故親に斷らずに人を戀したといふ事が、私を親から切り離さなければならない理由になるだらう。――

彼女は心の中にそう呟いて長いため息をつくと、靜かに寢がへりをうつた。

「愛があればある程此世の悲劇は深刻になる。」

まだ夫が學生時代に、彼女の手をしつかりと握つて云つてくれた熱情的な言葉をふと思ひ出した。

彼女は何時の間にか微笑みながら、眠りにおちていつた。

まぶしさに、ふと禮子がはれぼつたい眼をあけると、太陽の光は射るやうに、カーテンも何もないガラス窓を通して、ぐつすりと寢込んでゐる朋輩達のむき出しの腕や胸に照りつけてゐた。

もう八時頃にもなるらしく、外からは下駄の音や、話聲や何かを打つてゐるらしいカン〳〵といふ音が、電車の響きに交つて聞えて來た。然し家の中は夜中の樣に靜まりかへつてゐた。

禮子は陽をよけるために、體をすその方へずらして、仰向きになつた。それから少時ぼんやりと考へるともなしに昨夜

の事を考へてゐると、突然けたゝましく起床の呼鈴が鳴つた。

　彼女は不機嫌に起き上ると、

「はあい。」

　と怒鳴るやうな聲で、階下へ返事をした。それから此けたゝましい呼鈴にも平氣で、蛭の様に布團にくつついてゐる朋輩達を呼び起した。

　昨日の疲れがまだ拔け切らない體で、何時もの通り階下の掃除をすますと、彼女達は朝食とも晝食ともつかない粗末な食事を喉へ通した。

　遅番の女達は、お互ひに僅かな金の融通をしあふと、禮子ともう一人の女を殘して、風呂や髪結に出かけていつた。

　禮子が店の卓子に向つて、此處へ來てから一日も休んだ事のない日記をつけはじめた時、珍らしく朝のお客が入つて來た。昨夜二人連れで來た年かさの方の男である。

　禮子はテキを通すと、ビールを飲むその男の相手をした。彼女は妙に此男をいとはしく思ひ乍ら、むつつりとおし默つてゐた。彼女の頭には、昨夜の若い男と拾圓札と俥とが、ごつちやになつて浮んで來た。

「貴方がた、あれからすぐお歸りになつて？」

　彼女がさう聞かうとしたとき、表に明るい人影がさして、女の客が二人、戸まどいをした様に入つて來た。

「いらつしやい。」

　ふと立つて入口の方を向いたとき、禮子ははつとして一瞬間立ちすくんだ。

　其處には、禮子には從姉にあたるお君さんと、一番上の姉とが陽傘を手にして立つてゐた。

　――見つかつた。――

　彼女は然し、次の瞬間わるびれずに、姉の前へ進んでいつた。姉は默つたまゝ、入口に近い卓子の前にお君さんと並んで座つた。

「何をもつて來ませう。」

「紅茶でも。」

　姉は低い聲で答へると、もつてゐたハンカチでそつと涙をふいた。禮子はそれを見ぬ様にして、氣輕さうに紅茶を通しにいつた。

　小さいときから、自分を一方ならず愛してくれた此處から五里ばかり南のＯ街にすむ姉、この土地の郊外にゐるとか聞

いた従姉のお君さん——

禮子の直感は、いま白々しい顏をしてビールを飲んでゐる男が、幼い頃に一度會つたことのある從兄で、お君さんの兄であること、昨夜伜をもつて來て自分の名を呼んだのも此男であることを、一瞬間に理解させた。同時に、餘計なお世話だ、と男に對する憤りと不快の情とを持たずに居れなかつた。

紅茶を通した禮子は、母に似ていつもながら涙もろい優しい姉の前に腰を下ろした。

姉の涙を眼にとめた禮子は、流石にいくらかあわてゝゐた。禮子の顏に浮んだ微笑はゆがんでゐた。

彼女は、姉が持前の心配性から、あれやこれやと妹のことを想像して、どんなつきつめた心持で此處へやつて來たかを思ふと、少しも早くその心配を消してやり度い氣がした。

「何でもないのよ。私やつてみたかつたからやつただけなんですの。心配するやうな事でないのよ。」

禮子は眞面目にさう云つた。

「まあ心配するなだなんて。」

姉は責める樣な眼で、すぐ前にゐる妹をじつと見つめながら涙ぐんで云つた。重いといきをつくと姉は默つてうつむいた。

お君さんは氣の毒さうに、石の樣に默りこくつて、少しでもこの哀れな姉妹の邪魔にならない樣にと、つとめてゐる樣子であつた。

姉が何か云はうとしたとき、

「れいちやん。」

と帳場から禮子を呼ぶ女將の癇高い聲が聞えた。

「ちよつと待つてね。」

禮子は姉に云ひおいて、帳場の方へゆつくりと歩いていつた。帳場には「女客には相手になつていけない」と云つてきびしい眼で注意する女將のいつもの顏があつた。禮子は女將がそれを云ひ出す前に、

「私の姉が來ましたの。」

そう云つて、すぐに丁度出來上つた紅茶をもつて引かへして來た。

姉は何か汚いものにでもさわつてゐる樣に、椅子から腰を浮かしながらおど／＼して云つた。

「貴方はもう一ときだつて、此處にゐてはいけないのよ。此

土地の者がみんな貴方の事を知つて了ふんです。お父樣やお母樣に、こんな事をしてゐる事がわかつたらどうしますの。すぐ私の處へ行きませう。御主人には私から斷つてあげますから。」

禮子は今の自分を何程辯明したところで、かうなつた以上は、決して此「不名譽な處」に置くことを承知しさうにもない姉のつきつめた心持を考へて、

「お姉樣のよろしい樣に。」

と答へた。が、すぐそのあとから、自分の尊い生活を毀しに來た愛の暴力といふものを考へずには居られなかつた。そして力一ぱいそれに反抗して見たい氣持ちもするのであつたけれど、老いた父母に心配をかけたくない事を思へば、此場は何もかも默つてゐやうといふ氣になるのであつた。

禮子は姉を女將に紹介した。女將は彼女の姉の、相當な家の奥樣らしい上品なものごしと、化粧をしてゐないために、今朝は殊更女學生らしい禮子の姿とを見くらべて、如何にも驚いたらしく、何時になく慇懃に姉や禮子に接するのであつた。

姉は禮子が立派な資産家の娘であつて、こんなところに一分間でも置いておく事の出來る子ではないといふ樣な事を、時々ハンカチで涙をふきながら女將に云つてきかせた。

禮子は姉の隣に默つてうつむきながら、姉の口から無意識にもれる鋭い階級的な高慢な言葉に、幾度となくハラ／＼させられてゐた。そして、自分自身や自分の職業やを卑しめてそれを姉に對する禮儀の樣にしてゐる女將を、可愛想にも氣の毒にも思ふのであつた。

暇をもらつた禮子は、女將に今までの禮をのべると、自分の僅かな荷物をまとめる爲に、二階へ上つていつた。二階には何時の間にか外から歸つて來た朋輩たちが一かたまりになつて、何時もとは違つた眼で禮子を迎へた。多分彼女達は、姉と女將との會話をきいて、お互ひに何かと話しあつてゐたのであらう。

部屋の隅には禮子がやつた浴衣を着て、一番年弱な一人の女給が泣いてゐた。

「禮子ちやんは本當に仕合せね。」

朋輩の一人が、落着かない心持ちで行李の中を片づけてゐる禮子にさう云つたとき、禮子は人の世の忙しさといふものを、形にして見せられた樣な氣がして、熱い涙がぐつとこみ

あげて來るのであつた。

「私もうお別れよ。隨分お世話になつたけれど——。皆、體を大事にしてね。」

禮子は辛うじてそれだけを言つた。

——もう此人達とは一生會ふ事はないかも知れない。いろ〱なものから取り殘されてゆく不幸な人達よ。若しかすると一生涯、これより良い生活といふものを知らずに終へるかも知れない不幸なお友達よ。——

朋輩たちの多くが、大ていは家庭の貧しさから、幾らかの借金さへ負ふて、こうした境遇に置かれてゐることを知つてゐる禮子は、彼女達の運命を思ひやつて、暗い氣持にならずには居られなかつた。そして自分だけが何かしら異端者の樣に思へて、彼女達の前に詫びたい氣さへ起つて來るのであつて。

厚い鋼鐵の輪を頭にはめられて、そのまゝ上からいきなり叩きつけられた樣な感じを抱きながら、禮子は姉たちと一緒に少時の住家であつたこの小さなカフエーを出た。

其夜、從兄姉たちに別れた禮子と姉とは、〇街ゆきの列車に乗つた。二人は並んで腰を下ろした。

姉は眠つてゐるあたりの乗客にも用心深く氣をかねて、殆んどさゝやくやうな低い聲で話し出した。

「お君さんも、貴方が隨分大膽になつたと驚いてゐたよ。心配する樣な事でないなんて云ひ出すんですもの。」

如何にも憂はしげな口調で、たしなめる樣に云ふ姉の言葉に、禮子は不思議な空虚を感じないではゐられなかつた。そして返事をするのさへ物憂く、便りない氣がして默つてゐた。

「貴方はあの人と變な事になつて別れたんじやないの。」

姉はそれが一番氣になるらしく、しばらく默つてうつむいてゐたあとで思ひ切つた樣に云つた。禮子はそんな事まで想像されてゐたのかと思ふと、たまらなく不愉快な氣持になつて、首をたゞ横に振つた。

「お君さんの兄さんが、貴方のお湯へゆくのを見つけて、どうしても幼な顏に覺えがあるので、昨夜たしかめにいつたのよ。そして何もかもお君さんに打あけたので、お君さんは驚いて、今朝早く、私を迎へに來たの。本當に吃驚した。一體どういふつもりで、あんな處へなど入つたのさ。」

禮子は姉に何とか云ひたかつた。けれど自分が正直に云へば云ふ程、姉はます／＼自分についての無駄な心配を重ねてゆくであらうと思つた。彼女は結婚してから半年もたゝぬうちに、すつかり變つた自分といふものゝ成長に氣づいて驚いた。そしてこの一番親切な一番優しい姉とも、思想の上ではもう二度と會ふ事はないのであらうと、淋しく思はずには居られなかつた。

　禮子は、默つて窓の外に黑々と横はつてゐる夜の山に眼をやつた。姉も默つてうつむいたまゝじつと座つてゐた。

　汽車は、別々な心で默りこくつてゐるこの姉と妹を乘せて暗い夜空の下を走りつゞけて行くのであつた。

――三・九・四――

（二七頁から）

「毛のものを抱くの大すきよ、いゝ氣持だわ、」

　小犬がみんな貰はれて行つてしまつてからまだ間もない或る日など、曙生はかういひ乍ら、毛皮のショールを堅く抱きしめ、子守でもするやうにからだをゆすぶつてゐた。

　もう一ケ月もしたら、チロは又秋の子供を生むことだらう。あの春の子供との別れられない別れを、お母さんからさう何匹も犬を飼つて置くわけにいかなることを理屈づめに說かれてやつと諦めたのも、實は秋になつたら又可愛いゝのが生れると思つたからのことであつたに相違ない。

　子供たちは今からもう待ち遠しがつてゐる。

（三年九月）

編輯室にて

早や秋も半ばになつて、あれやこれやと考へて來るとほんとうに氣で氣でない焦燥を感じます。

冬物のお仕度などみんな、ちやんとお濟みになりましたか？ 子供もちの者や、職業をもつ者は全く夢のやうに一日々々が暮れてしまふのですからやりきれませんね。

ぼんやりと、一と月や二た月暮してしまふのはワケがないのですもの。

秋になつて痛切に思ふことは、本をよみませう、といふこと。何事によらずよく考へてくらしたい、といふこと。女の生活は殊に、今いろんな意味で過渡期にあると、私に考へられます。非常に新しい空氣も漂つてゐるけれど、封建時代そのまゝの古い〳〵因襲も私たちをまだ随分强い力で縮めつけてゐると思ひます。

古いものに巻かれてしまつたら、今日の新しい時代に生きてゐる私たちの生き甲斐がどこに芽を出しえませう。然し、新しい時代に生きることも随分な苦しみであります。未だ新しい生活の礎が何にも出來上つてゐないのですから。

そこに、私たちの生き甲斐のある努力が生れるのではありますまいか。婦人消費組合協會の仕事にしろ、職業婦人協會の仕事にしろかう思ひ〳〵働いてゐられることの幸福さ。待ちかねて本誌をよんでゐて下さる人たちの氣持が私たちの無限の力となつて、働かせて貰つてゐます。

どうぞ、もう一人づゝ、あなたのお友人を「婦人運動」の讀者にさそつて來て下さい。

書店に出して賣れるやうにするためには、あともう一息ふんばつて讀者を殖やさなければなりません。

私たちが雑誌經驗上の泣言をいふと、何しろ、婦人界にたゞ一つしかない、理想あり主張ある婦人雑誌なんだから、と、何とかして育てゝゆく様にいつも人から勵まされて居ります。

それにしても、もつと〳〵元氣を出して積極的に社會に働きかけてゆけるまでにこの雑誌を、生氣溢れるものにしたいものです。

（むめお）

原稿募集

どうぞ、どし〳〵原稿を送つて下さい。締切は毎月十二日です。

いゝ筆を持つて世にかくれてゐる人たちや、いろ〳〵眞劍に考へてゐられるお母さんたちや職業婦人の氣持をこの雑誌の上に反映したいと、いつもさう思つてゐます。

私はいつもさう思ふて、生き甲斐のある努力を協力したいのだと、自分で自分に云ひきかせてゐるのであります。

今月はをそくも月末には雑誌が、お手許にとゞくだらう。來月は、もつと早くしなければ——

もうお彼岸だといふ頃になつて暑さが續きます。何て變な陽氣なのでせう。病人も多いと聞きました。みなさまお元氣ですか？ どうぞ〳〵御身おいとひ下さいませ。職業婦人社では、みんな元氣よく働いて居りますから御安心下さい。

熱心な讀者諸姉の御力添で「婦人運動」も一日〳〵と成長し發展しつゝあります。二人三人とお友達を紹介して下さる方も多く、そこにしつかりとした聯絡を保ちながら伸びてゆく様を、私共は愛兒の成長をながめるやうな喜びを以て、感謝しつゝなほ一層の努力をとはげまし合つて居ります。忙がしい中からお心のこもつたおたよりをいたゞくと、もうたまらなく嬉しくなつて、くりかへし〳〵拜見してゐます。かうして本誌を通じて未知の友と日に增ししつかりと結びつけられてゆく樂しさの前にはどんな事でも耐へてゆかれるのです。でももう少し奥さんの御苦勞を輕減させて上げたいと思ひながらまだやつと肩上げの取れた廿二才の私には、心ばかりで今更のやうに未熟な自分がはがゆくつてなりません。もつと丈夫な身體と豊富な能力が欲しい。それにつけても勉强しなければならないとこの秋は一生懸命つとめるつもりで居ります。

くだものやの店頭に、栗や柿やぶだうが顔をのぞかせて、もう秋が私共のそばにもやつて來ましたのに、あのきれなコバルト色の空もしみ〳〵見上げる日が少くなつて、私の頭もいつの間にか都會病にうかされさうになつて來ました。せめてよく晴れた日には、心おきない友と打ちつれて草の上にねころんで來たいと思ひます。母校の裏山のすゝきの穗ものびたらうし、寮舍の庭の萩の花も咲いたらうなどゝ、いろんな思ひ出が甦へつて來て、しづかな虫の音を聞きながら、思はず夜の更けるのも忘れてしまひます。ほんたうに私は魂の故鄕なのですね。讀書の秋、思索の秋、センチメンタリストならずとも、あの美しい月を見るとき、星を仰ぐとき、云ひ知れぬ哀愁を覺えて、しんみりとした心持にかへるでせう。心ゆくまで、秋のふところに抱かれて居やうではありませんか。（フミコ）

今まで「開かずの家」などと惡口を云はれた事務所も先日から、加藤和子さんが泊つて下さることになり、その上編物の敎授を初めて下さる事になつて急に賑やかになりました。

十月からは編物の講習會の外にミシン裁縫の講習會も催しますから、皆さんお出席下さい。（委しいことは、お問合せ下さい）それにミシンが來たので、代る〳〵仕事をしに來て下さる方もあり、隨分賑かです。

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部	貳拾五錢	（郵稅一錢）
半年分	壹圓四十錢	
壹年分	貳圓八十錢	

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和三年九月卅日 納本
昭和三年十月一日 發行
東京市牛込區市ケ谷本村町四
發行編輯兼印刷者 村山文子
東京市神田區淡路町二ノ三
印刷所 協書社
東京市牛込區市ケ谷本村町四
發行所 職業婦人社
振替東京六四一六〇番

平凡

大衆娯樂雜誌平凡生る!

愈々十月より創刊!

月一回一日發行
五百頁 五拾錢

平凡の眞理!

太陽の光、水、空氣、米、野菜、夫婦の營み、朋友の交はり、みんな平凡なありふれたことだが人間生活には最も大切なことである。

雜誌『平凡』は大人は勿論婦人子供老人にも喜ばれる大衆雜誌である、

雜誌『平凡』は安くて美しくて面白くて爲になる世界一の雜誌である、

雜誌『平凡』は萬人と共に生き、萬人と共に笑ひ萬人と共に知り、萬人と共に成長する。

雜誌『平凡』は新時代の日本人の一番よきお友達であり、また最も親切な先生である。

雜誌『平凡』は毎日の御飯のやうに何人にもなくてはならぬ生活必需品である、

是非御愛讀下さい!

東京麴町 下六番町 **平凡社** 振替口座東京 二九三六九番

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和三年九月三十日 印刷納本
昭和三年十月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第六巻 第九號 （定價二十五錢）

